
「好き」と言ってもいいですか？

彩瀬姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「好き」と言ってもいいですか？

【Nコード】

N7820F

【作者名】

彩瀬姫

【あらすじ】

B.L。初めて「好き」って気持ちを知った高校生、健斗。でもその相手は、俺と同じ男の人。好きで好きで。俺を狂わせる。彼と話してみたいけど、話せない。どうすればいいんだあ……。——初めての恋心に少しずつながらも、立ち向かっていく男の子のお話です。

1・初めての気持ち（前書き）

この話はボーイズラブです。苦手な方はご注意ください。

1・初めての気持ち

『好き』

この気持ちに気付いたのは、友達なにげの何気ない一言だった。

「お前、有泉のことよく見てるよな」

ええ……？

それを言われるまで、本当に何も気づいてなかった。

自分が有泉のことを目で追っていたことも。

有泉を見て、時々感じたもの。

切ないっていうもの、愛しいというもの。

そつゆう感情が今、この気持ちのことを言うことさえも。

有泉とは、クラスメイトのありいすみしゅんや有泉俊也のこと。有泉は小柄でも大柄でもなく、運動が特にできるわけでもない、へいぼん平凡な奴だ。

けど。俺は。

——有泉の声を聞きたび、俺は有泉の方を向いていた。

——有泉の笑顔が見えるたび、俺も笑顔になっていた。

——有泉が悲しそうにしてるたび、俺も悲しくなった。

——有泉の仕草しぐさを見るたび、俺の鼓動がトクトクと早くなるのを感じた。

知らないうちに、いつの間にか。

俺は、有泉を好きになっていた。

こんなの変だろう？

だって俺は、男。

有泉も、男。

…でも、この気持ちは紛れもなく、恋心まき。

16年間生きてきて、初めて「好き」という気持ちを知った心——
——初恋。

それは嬉しいはずなのに……。

絶対、実らない恋。

忘れなければいけない恋。

だって、同性を好きになるなんて、許されるはずがない。

——絶望的な恋。

もう、この気持ちをどうすればいいのか……わからない。

1・初めての気持ち（後書き）

初投稿です。

下手な文だと思いますが、読んでくださって有難うございました。
連載するので続きも読んでくださるとうれしいです。

2・最初の一步

——有泉への恋心に気づいて、1ヶ月がたった。季節は冬。

態度はでかいが、小心者の俺に一言だけ、有泉と話す機会チャンスがあった。

それは、有泉が机から消しゴムを落としたとき。

勇気を振り絞って（我ながら、しょばい勇氣だと思っが）俺が有泉の消しゴムを拾ったんだ。

その時俺に向かって、有泉は満面まんめんの笑みで言った。

『ありがとう』

ドキューン！！

胸に天使の矢が刺さって感じをこっという時に言っただろうか？

……あの時の有泉、かわいかったなあ（ハート）

……。

…。

そこでまたも気付いてしまった。

——何で俺、こんなにも初々しく、乙女チックなこと言っちゃって

るんだ！！しかもハートって何だ、ハートって……。

はぁ……。

心の中で大きなため息をつく。

……恋なんて、辛いし、苦しいし、嫌だって何度か思った。

でも、この恋心は中々消えてくれない。

有泉への思いは消えるどころか、ますます大きくなっていくばかりで、どうにも止まらない。

いつそこの気持ちを言ってしまうおつかとも思った。

けどそれは俺にはできない。

『気持ち悪い』って言われて平気でいられる器うつわを俺は持っていないから。

『もう、近付かないで』なんて言われたら、俺は一生立ち直れないと思うから。

それだけじゃない。

有泉がもし、昔の俺を知ったら……。

どうすればいいのかわからない。友達に相談することもできない。もう、一人で悩むことしかできない。

「はあ……」

また、ため息をつく。

それを見た親友の宮沢真吾みやざわしんごは、心配そうに俺に話しかけてくる。

「健斗。お前大丈夫かよ？この頃元気ないな」

お前のせいだよ、って心の中で真吾に当たる。

そう。こいつが俺の元凶げんきよう。

俺に、気付かせてくれなくてもいい恋心を気付かせた奴。

「あつそうか？そんなことないけどな……あはは」

無理やり笑ってせいか、顔が引きつっている気がする。それを親友である真吾が気づかないはずがない。

でも、とっさに話に触れてはいけないと察したのだろう。

真吾は、話題を変えようとする。――が、さすが親友！！

「あつもしかして、恋のお悩みこひのわづらひ？恋煩こひづらひいとか？」

なんでこうゆうことばかり、痛いところを突いてくるんだ。

本人は俺を元気づけるために茶化^{ちやか}した話題を出したつもりだったんだろ。しかしそれが見事、俺に的中し、固まってしまった。

俺のその反応に、真吾は素直に驚^{おどろ}いたらしく、氣を使うのを忘れて、
またも痛いところを突いてくる。

「お前。本当に恋してんの？」

……ここまできて、誤魔化^{ごまか}してもしようがないよな。

全部…は言えるわけがないが、少しだけ打ち明けると決心した。

『一人で悩んでいても答えが見つからない時、頼るべきは友』
と勝手に納得し、俺は真吾と一緒に屋上に行き、自分が恋していることを話した。

もちろん、有泉に恋しているっということは秘密だ。

だって相手が男だってばれたらどんな目をされるか……。

「……。やっぱりな。そういうことか」

俺の話を聞いて、一人納得したように頷く真吾。

やっぱりって何？そういうことかって何？

「健斗。お前、その好きな奴って有泉のことだろ」

「ええーーーーー！！何で知ってるんだよ……ってああ！」

口を手で覆^{おお}ったが、もう後の祭り。

真吾が言ったことを、おもいきり肯定してしまった。

真吾は呆れたようにため息をつく。

「正直な奴。…まっ、大丈夫だ。俺がその恋の悩み、解決してみせるし」

偏見^{へんけん}を持たず、俺の恋を手伝ってくれるという真吾。

もしかして真吾は、俺にあの一言を言ったときから、俺が有泉に恋してることを知っていたのかもしれない。

やっぱり持つべきは親友だ！

と、今度はしつかり納得した。

「なあ。有泉と仲の良い松澤っているだろう」

「えっ？ああ」

「俺、そいつと付き合ってるし」

「うん？松澤……」。

「松澤って、…松澤達^{たつのり}則のことだよな？」

「ああ、そつだよ」

俺はその返事に、目を瞠^{みは}る。

だって、だって松澤って……男、だよ……な？

つまりそれは。

「男同士ということか？」

「当たり前だろう。タツが女にでも見えるのか」

「いや、見えませんが……」

何かわかんないけど、真吾の威圧^{いあつ}オーラにやられて、自分らしくもない言葉を返してしまった。

「お前の言いたいことはわかってる。男同士でなんて、って思ってるんだろ？でも、お前も恋してわかっただろう。そんなの関係ないってこと。同性とか異性とか、男とか女とか、そんなもんはただのお飾りでしかないんだ」

真吾の言うとおり……。

そう、俺はもう知っていた。

わかっていた。

男とか女とか、好きになっただけなら関係ないこと。

自分の意思が大切なこと。

でも俺は……。

心配そうな顔をした俺に、真吾は優しい言葉をくれた。

「大丈夫。さっきも言ったけど。手伝うし」

ありがとう。真吾。

——俺は真吾に励まされて、この恋を自分なりに頑張ろうと思った。

よく考えてみれば、俺はまだ何もしてない。

『努力』

意味もなく嫌いだった言葉。

でも、今日ほんの少し『努力』って言葉、好きになれた気がした。

3・チャンス到来

次の日。

俺、藤堂健斗。

わけが分からず混乱中。

「藤堂君、おはよう。今日の勉強会、楽しみだね」

朝一番。

有泉から俺に、話しかけてきた。

驚きすぎてまともな言葉が出ない。

「えっあう……ええっとお……」

有泉が不思議そうな顔をする。

「あれ？宮沢君から聞かなかった？勉強会のこと」

勉強会？

有泉から話しかけてきたことに驚きすぎて、話をしっかり聞いていなかった。

「ええっと。き、聞いてないけど」

俺、緊張しすぎだろ……。男なのに、おどおどして。情けない。

有泉はそんなことを気にしていないのか、話を続ける。

「えっそうなの？じゃあ僕から話しとくね」

有泉の話によると――

真吾が平井に勉強会をしないかと頼んだそうだ。

それじゃあ俺と有泉も一緒に……。って。

というか。

明らかに俺のためっていうか、有泉と話す機会をくれたのだろうか？

嬉しいのやら、自分から話す機会を作れなくて情けないのやら。

……真吾がくれたせつかくくれた機会。無駄にできない。

「わかった。俺も勉強会、参加する」

「はあ……。よかった。そう言ってくれて」

なぜかホッとしたように言う有泉。

もしかして俺、なんか怖がられているのか？

チャンスはきたものの、自分の考えに傷ついた健斗。

嬉しさ半分、悲しさ半分。

複雑の気持ちだった。

4・傷つけて、傷ついた。

——放課後、俺は急いで帰って出かける支度をした。

急に平井の家で、勉強会をすることになったからだ。

メンバーは俺と真吾と平井、そして有泉。

……さつき、真吾に言われたのだが。

『いいか？これはチャンスなんだ。有泉に、積極的に話しかけるぐらいしろよ。他にも、勉強教えるとかさ……。わかったな？』

多分この勉強会の目的は、俺が有泉と少しでも仲良くなることだと思う。

でも、話しかけるぐらいしろよ……。って。

はぁ……。

それができたら苦労しない。

俺は小心者だから。

そんなこと、できるはずがない。

……。

ああ……。

駄目だ、駄目だ！

そんなことじゃ、いつまでたっても有泉と仲良くなんかできるわけがない。

できないって思っただけ、できないのは当たり前。

「努力」する。

そして、自分から。

『積極的に』

やらないと、何も変わらないんだ。

そう、真吾が教えてくれた。機会をくれた。

だから少しずつでも変わろう。応援してくれる真吾のためにも。

何より自分のためにも。

「で、わからない所ある人」

……俺がいろいろ考えてるうちに、勉強会は始まっていたみたいだ。

平井は、俺たちにわからないところを訊く。

平井とはあまり喋ったことはないが、学年で成績が1番いいと聞いたことがある。

「俺、全部!!」

「僕も!!」

真吾と有泉が勢いよく手を挙げる。

有泉って、結構乗りのいい奴なんだ……。

明るいつてイメージはあったけど、いつも静かだから、少し意外。

新たな一面を知れた嬉しさに浸っていた。

だが。

次の平井の言葉で、俺は気分は急降下。

「藤堂。わからない所はどこか教えて」

それは、俺の頭が悪いといたいのか。俺を馬鹿にしてるのか。

……っと言いたいところだが、怒る勇気なんて俺にはない。

「別にないけど」

そっけなく返事を返した。

実は俺、成績順位は学年290名中20番に入ってる。

だから平井みたいに頭がいいわけじゃないけど、大抵はできる。

「そうなんだよね。健斗って顔に似合わず頭いいしね」

『どついうことだ』と目を向けると。

「ホントのこと言っただけえ」

真吾は悪びれもせず、そう言った。

その答えにムツとするが、そんなの痛くもかゆくもないのか、真吾は面白そうに俺を見てる。

気に食わない……と思うのだが、やっぱり俺は口に出して反論するのが苦手みたいだ。

「ねえ。藤堂君」

「へえ？」

突然声をかけられて、俺は変な声を出してしまった。

その声が返事だと思ったのだろうか。

有泉は話を続ける。

「今日は藤堂君に勉強、教えてもらっね。ねえ？いいよね！！」

……。

……えっ？

突然の申し出に、言葉を無くす。

かわいい……。

俺と有泉はそんなに背は変わらないが、有泉が童顔ってこともあるだろう。

なんか有泉って、小動物みたいだ。

俺が言つと似合わないと思うけど。

キュン!!

って感じがする。

「ええ……とダメ？」

有泉は繰り返し上目づかいで訊いてくる。

もちろんその答えは。

「ああ。いいけど……」

緊張してるのがばれないように、質問をはやく返す。

「で、有泉はどこがわからないんだ」

そう訊くと、有泉は平然と答える。

「全部」

さっきも同じことを言っていたが、まさか本当だとは思わなかった。

……微笑ましいな。

思わず笑みをこぼすと、有泉はなぜかムツとする。

「なんで笑ったの？」

……。

有泉のキーンとするような冷たい声を聞いたので、俺は固まってしまった。

真吾と平井も驚いているようで、二人も目を^{みは}睜っている。

何か俺、悪いことした？

あんな冷たい声、出させるようなことした？

困った俺は、真吾と平井に目で助けを求めるが。

相手にされず、『自分でどうにかしろ』って言うてる。

——ど、どうすればいいんだ……。

……もしかして俺が笑ったことで、馬鹿にされたと思ったのだろうか？

それだつたら困ると、あわてて謝る。

「いやあ……。あのな。別に、その馬鹿にしたわけじゃないんだ。ごめんな」

そう謝ると、有泉は首を横に振る。

「僕こそごめん。その…むきになって。そういうのなんか敏感で…」

えへへと笑って、有泉はそう言った。

でも。

震えるような目をしている、と思うのは気のせい？

無理やり笑っている、と思うのは気のせい？

悲しそうな顔をしている、と思うのは気のせい？

……それほど、俺が笑ったことに傷ついたのかだろうか？

それとも、俺のこと。

嫌いになったのだろうか……？

5・穏やかな時間

勉強会が終わってもう一週間が過ぎていた。

あの後、勉強会は気まずくなく……ちょっと気まずくなってしまったが、何とか終わった。

勉強会は終わったが、俺から休み時間や放課後に積極的とはほど遠いが、有泉に少し話しかけるができた。

有泉も嫌な顔せず話を聞いてくれたから——多分嫌われてないと思う……。

……少しは友達としては認めてもらえただろうか？

でもなんだろうな。

あの時の有泉の顔が忘れられない。

冷たい声、悲しそうな表情。

俺がそうさせたと思うと心が痛い。

どうしてあんな顔をしたのか聞きたかった。

でも有泉が。

『聞かないで。そのことに話を触れないで』

って言ってる気がしてたから、聞けなかった。

無理矢理でも聞いて嫌われてたら困る。

……平井に聞いてみるのはいいかもしれない。

いつも有泉と一緒にいるのは平井だ。

多分平井は俺が有泉のことを好きって知ってるはず……いや、絶対知ってる。

平井はもともと知らなくても、真吾が勝手に喋ったと思うから。

——アイツ、口軽いしな……。

そうと決まったら、さっそく平井に聞いてみるか！と平井の席の方を向く。

ああ！

そうだ。そうだった。

大事なことを忘れてた。

いつも有泉と一緒にいるってことは、平井には聞けないじゃないか。
有泉がいれば話せないってこと。

「はあ……っていつてえ!？」

ため息が出た瞬間だった。頬を抓^{つね}られた。

ボーっとしていたので、人の気配に気づかなかった。

もちろん、やった奴は顔を見なくてもわかってる。——真吾だ。

俺の反応を見て笑ってる。

「お前、本当に面白いな」

「……」

むきにすると揶揄われると思い、無視した。

これで、どうだ。

と思っのもつかの間。

本当にこいつは、痛いところを突いてくる。

「いつまでも落ち込んでるなよ。ため息ばかりして。幸せ逃げるぞ！」

グサッ！

グサッグサッグサッ！！

——おまえは、針か。

ってぐらい俺の心を突き刺した。

……確かにそうだな。有泉に恋してから毎日のようにため息が出る。

考え込む俺を見て、真吾は呆れ顔。

「すごい変化。中学の時のお前なんてそれはひどかったもんな。こ
うゆつのに関して。それがこんなに初々しくなって」

茶化すように、真吾は俺の頭をなでる。

「い、言うなよ。昔のことだろう」

俺を下を向きながら言った。

昔——中学の時。過去。

全て忘れてしまいたい。なかったことにしてしまいたい。

「……」

「……」

なんとなく気まずい。

真吾もそう思ったのか話を戻そうとする。

「あ……まああれだ。お前は積極性がないんだ。俺が手伝って
いたんだから手伝ってやるよ」

真吾は無理矢理、俺を席から立たせ、手をひっぱる。

そして引つ張る先には有泉と平井が。

ええええええ。

おいっ！

ちょっと待て。まだ心の準備が！。

とオロオロしてしまう。

そんな俺を見て、真吾は背中を強く叩いてくれた。

堂々している、と。

俺をうん、と頷いた。

普段真吾はちゃらちゃらしててよく俺を揶揄って面白がるけど、こ
うやって俺を助けてくれるときがある。

そんな真吾が憧れだった。男らしく堂々としてるのがすごく羨まし
かった。

俺も頑張らないと!!

そうして、俺は有泉と平井の所に行った。

（本当に俺は小心者だよ……。席に行くぐらいでオロオロして…
情けない）

これでいいと思ってた。

有泉と少しでも話せれば。

一緒にいることができれば。

このままでいい。

この時間がずっと続けばいいと思ってた。

穏やかな時間は流れていく。

坦々（たんたん）と、一定に。

……でも、穏やかな日々は長くは続かない。

6・転機…？

「おはよう、藤堂君」

「ああ、おはよう」

席に着こうとしたら、有泉から挨拶してくれた。

この頃、有泉から話しかけてくるようになった。

嬉しい

その気持ちをこの頃、頻繁に感じるようになった。

話せるだけでこんなにも嬉しいなんて。

有泉と話せるようになる前には、思いもなかった。

これも真吾のおかげかな——もちろん本人にはそんなこと言わないけど。

言ったら付け上がるだけだ。

はあ……。

頻繁になつているといえばため息もだ。

一日十回はしてと思う。数えてないから正確な数はわからないけど。

有泉を見ると自然と出るのだからしょうがない。

有泉の席を見ると、有泉は平井と何か話してる。

楽しそうだ。

平井といると、有泉はいつも笑っている。

二人が喧嘩してるところなんて見たことがない。それほど仲がいいんだろう。

羨ましいなと思う。

それは俺という時より、平井という時の方が楽しそうだからそう思うのだろう。

有泉と平井がいつ仲良くなったのかは知らないけど、平井が先に仲

良くなったのだから、それが当たり前なんだけど。

ひと眠りするかと机に顔を伏せたとき、後ろから誰か引っ張られた。

また真吾だ、と嫌々後ろを向くと……。

真吾ではなかった。

「有泉？」

俺が声に出したとおり、俺を引っ張っていたのは有泉だった。

さっきまで有泉、自分の席にいたのに。

「ちょっときて。お願い！」

とぐいぐい引っ張る。

「ああ。わかった」

よくわからないままトイレに連れていかれた。

トイレには誰もいないようだ。

どうしたのだろうか。有泉は口を開こうとしない。

「どうした？」

俺から話しかけると、なぜか有泉は深呼吸した。

「はぁ……ふう……」

しばらく沈黙していたが、有泉は何かを決心したように俺に話し始めた。

「あのね。お願いがあるんだ」

下を向いたままそう言った。

有泉がどんな表情をしているのかわからない。

でも、なんとなく不安そうにしているのがわかったので優しく返事をした。

「いいよ」

「また勉強会をしたいんだけど……えっとお……その……なんていうかあ……」

……何か有泉の様子がおかしい。さっきからそわそわしてるし、早口だ。

落着きがある有泉にしては、珍しいことだ。

それに、俺は有泉の様子だけではなく、おかしいと思うところがある。

——この話を別にここで、コソコソしなくてもいいんじゃないかと。

さっきまで平井と一緒にいたんだ。その時、俺を呼んでくれればいい話だ。

そんな俺の視線を感じたのか、有泉は白状した。

「ごめん。嘘言った。ホントは勉強会じゃなくて、相談にのってほしいんだ。でもこの相談、タツと宮沢君に知られたくないんだ」

平井に言えなくて、俺には言える相談。
なんかよくわからないけど、これは、もしかして俺は頼られてるのか？

そう思うと気分が浮上した。

「ああ、わかった。で、どうするんだ？」

「次の土曜日、僕の家に来てほしいんだ。その時、内容は説明するから……」

有泉が話してる途中に、誰かがトイレに入ってきた。

誰か——平井と真吾だ。

「おっ！なんだ。健斗と有泉じゃん」

俺と有泉は固まってしまった。聞かれてないよ……な？つと目で問い。
有泉は大丈夫だろうと頷き、話に加わった。

「うん。ちょっとトイレで会って」

「あ……ああ」

有泉は俺だけに聞こえるように「また後で話すね」って言って、トイレから出て行った。

「お前ら、いつの間に仲良くなったんだよ」

平井から訊いてきた。

「え、ああ……最近かな……じゃあな」

俺は、トイレから逃げだした。

拳動不審だったと思うが、一番気にしてるのはそれじゃない。

ああ……ああ。

せつかく少しいい雰囲気だったのに。

真吾の馬鹿。

でも、まあいい。

約束ができた。二人で会う約束が。

……一番最初にこのことを真吾に伝えたかったけど、真吾には秘密
って言われてるし。

言えないのが少し残念。

そんな呑気なことを考えるほど、俺は浮かれていたのかも——いや、
完全に浮かれていた。

7・静けさ

——相談する日は、明日の土曜日。

二人っきりになれると思うと楽しみだ。

有泉のことを思っていたら、無性に有泉のことが気になった。

有泉の席の方に耳を傾けてみると、有泉と平井の声が聞こえる。

「ねえ。タツ。また勉強教えてよ」

「ああ。わかってる。…お前、本当に馬鹿だよな」

「なにそれ、タツの教え方が悪いだけじゃないの？」

「ほほう。そんなこと言うなら、もう教えてやらない」

「ごめんごめん。教えてってば!!」

二人の笑い声が聞こえてくる。

いいな……平井。

楽しそうだな。

……でも、明日は二人で会うことができるし。

まあ、いつか！！

明日のことをいろいろ考えていると、不意に真吾が話しかけてきた。

「……お前。なんかこのところ楽しそうだな」

「……！？」

そつえば今、真吾と弁当食っていたんだっけ。有泉のことばかり考えていたから真吾のこと、すっかり忘れていた。

「今の反応、何？有泉とお前、この頃仲いいし、なんかあった？」

ありました！！と言いたところだが、素直に言えないのが残念。

本当は言いたいけど、駄目って言われてるし。

曖昧に誤魔化すことしかできない。

「特にないけど」

ふうんと信用してないように頷く真吾。

「言いたくないならいいけど。……まあよかったじゃん。有泉と仲良くなれて」

俺は頷いた。

本当によかった。

有泉と仲良くなれて。

話すことができるようになった。有泉からも話しかけてくれる。

他の人からは、平凡な幸せに見えるかもしれない。

でも俺にとっては、とても幸せなことだった。

7・静けさ（後書き）

次回、急展開！？

8・有泉の気持ち

俺は今、有泉の家に来ています。

……来ていますというか、正確には有泉の家の前に来ています。

玄関のチャイムが鳴らせなくて約三分。

ずっとボタンの押そうするのだが、押せないでいる。

自分の小心者っぷりに呆れているのだが、どうしてもできないのだ。
人差し指でポーンと押せばいいことなのに。

そうグズグズしていると約束の時間が過ぎてしまう。

ああ〜もういくぞ。せーの。

ガシャ

俺が、チャイムを押す前に有泉が、ドアを開けた。

「あれ藤堂君。そこにいたの？」

三分も前から待っていたなんて言えるはずもなく。

「今来たところ」

と言った。

「そっか。じゃあ中、入って」

有泉に連れられて有泉の家に入った。

「お邪魔します」

階段を上り、右に突き当たったところに有泉の部屋があった。

座布団が出されて、俺と有泉は向かい合って座っている。

「……」

「……」

沈黙が続く。

——どうも頑張れそうもない。

二人きりは、どうもいつも以上緊張するのだ。

しかも学校じゃないから、余計緊張してるんだと思う。

有泉の顔を見ることがすら出来なくて、俺は下を向いてる。

「ねえねえ。藤堂君。知ってる？」

有泉は俺に問いかけてくる。

なぜかいつもより有泉の声が小さく聞こえる。

「ええ。なにが知って……っ!？」

顔をあげて返事しようとする、有泉の人差し指が俺の唇にとめた。

静かになって意味だろう。

だが、俺はその意味はどうでもよくて。

ただ、心臓が高鳴りしている。

うわぁ……。

すげえー有泉の指、柔らかい。

なんかマシユマロみたい。

っーか、この指食べたい。

俺は変態か。

このままでは話にならないと、そつと有泉の指を離す。

はぁ……。

……有泉は、無意識にやっ たつもりだろうが、俺的にはかなりヤバかった。

ジェットコースターになるより心臓に悪いと思う。

とにかく平常心を取り戻すために、少し有泉と距離をとって話を続ける。

「なんだよ。突然」

小さな声で喋る。

「あのね。タツと宮沢君がつき合ってること知ってる？」

「え、有泉も知ってたのか？」

知らなかった。

有泉が真吾と平井が付き合っているのを知っていたなんて。

「うん。でさ、相談なんだけど」

本題に入るようだ。

「うん？」

「二人とも、まだデートに行ったことがないんだって」

そう言えばそんなことを、真吾から聞いたことがある。

二人とも運動部に入ってるから休みがないって。

しかも部が違うから、休みの日が重ならないとも言ってた。

「だから、デートを企画したんだ」

「ええ？」

「で・え・と。さっきも言ったじゃん」

「ああ。悪い」

俺が驚いたのは、デートと言うわけではなく、相談が真吾と平井のことだったってことだ。

有泉が言うには――

テスト期間で部活がなくなるから、その時デートをすればいいというものだ。

でもそれだと真吾が勉強できなくなるから、定期的に勉強会をすることによつと考えたそうだ。

でも、その話を聞いてると。

「有泉が勉強会をするって言ったのか？」

「うん、そうだけど」

それじゃあ。

「真吾が勉強会をするって言ったのは嘘なのか」

「……」

有泉は下を向いたまま喋らなくなった。

……どうすればいいのだ。

「なんで、その……自分からってこと言わなかったんだ？」

できるだけ、優しく問う。

「……」

無理に言いすぎたろうか。

有泉は下を向きながら、ポツリポツリ話し始めた。

「その、僕ね。平井には幸せになってほしいんだ」

下を向いているからしっかりとはわからないが、有泉の目につつすら涙が張ってるように見える。

「僕、タツしか友達いないからいつも一緒にいるけど。でも、タツには宮沢君がいる。僕が迷惑なのはわかってるんだ!!」

「……」

俺は有泉の勢いに押され黙ってしまう。

こんなに勢いよく話す有泉が想像できなかったというのもあるだろう。

でも、それだけじゃない。

『平井しか友達いない』って言葉に傷ついたんだ。

それだったら……。

「俺は何なんだ？有泉にとって俺は友達じゃないのか？」

ううん。と有泉は首を横に振る。

それに少し安心して、俺は言葉を続ける。

「それに、平井が有泉のこと迷惑に思うわけないだろ。いつも一緒

にいるじゃないか。お前と一緒にいるときの平井、いつも楽しそう
だ」

励ますようにそう言うと、有泉はぼそつと呟く。

「でもタツの一番は僕じゃない」

その言葉を聞いた瞬間、俺は凍りついた。

俺は気づいてしまったんだ………有泉の気持ちを。

9・辛い

「ねえ？藤堂君聞いてる？」

「ええ？ああ……」

「どうしたの？ずっと上の空って感じだけど」

放課後。

俺と有泉は真吾と平井のためのデートの計画をしていた。

有泉といるってことを忘れるぐらい。……違う、忘れてしまいたいぐらい俺は弱りきっていた。

有泉の気持ちを知ってしまったからだ。

有泉が。

——有泉が、平井のことを好きってことを……。

あの日有泉が言った言葉。

『でもタツの一番は僕じゃない』

その言葉を聞いて有泉の気持ちを知ってしまった。

どうせなら知りたくなかった。

それに有泉が平井のために……好きな人のために、デートを企画したってことも知りたくなかった。

なんだ……。

俺、馬鹿みたいだな。

二人で会うことができる、何て浮かれて。

何もかも平井のためにやってことを……。

「ああ。いや、何でもない」

俺は有泉の気持ちを、知らないふりすることしかできない。

『辛い』

前にも似たような感情をもった。

——あれは、確か有泉を好きになっただけの頃だった。

男が男を好きになって、どうすればいいのかわからなかった。困惑もあった、伝えられないのがとても辛かった。

そんな時、伝えることが大事だって真吾が教えてくれた。男同士でも大丈夫って教えてくれた。

有泉は平井が好きで。俺は有泉が好き。

こうゆう時はどうすればいいのだろう？

いつも真吾に頼ってばかりだった俺。

でも今は、しっかり自分で考えなきゃいけない。

これは俺の問題だから。

……辛い、すごく辛い。

もう訳がわからなくなるくらい辛くて、
なにも思いつかない。

10・失恋

今日は、有泉と俺が企画したデートの日。

昨日、このことを言ったとき、真吾と平井はとても驚いてた。

『何だそれ』

真吾と平井二人して言った。

『だからデートだよ。デート』

『……………』

呆けてる二人を見て、有泉はムツとする。

『二人がデートできないって言うから、藤堂君と一緒にデート企画したのに……………』

ムツとしてるのは確かだけど、うつすら淋しそうな顔をしてる。

有泉の気持ちを気づいただけで、こんなにいろいろ見えてくる。

有泉は平井の一言一言、一生懸命聞いていること。

平井の一言で笑顔になること。

俺はどうして気付かなかったのだろうか？

こんなにもわかりやすかったのに。

……否、気づいてたんだ。俺は。

ただ、見ないふり、気づかないふりをしてただけだ。

平井と話しているときに一番楽しそうにしていたことをわかって
いた。

気づきたくなかった。わかりなくなかった。

だってわかってしまったら、俺が失恋したことを意味するから。

「おい。藤堂君！！」

有泉は俺に向かって手を振っている。

俺もそれに答えるように手を振る。

「遅いよ。藤堂君」

「悪い」

有泉に軽く謝る。時計を見てみると9時54分。

集合時間の10時より早く来たはずなのになぜか怒られた。

以外に厳しいのか？

デートの定番というと「遊園地」と有泉が言うので遊園地になった。

…主役の二人はまだ来ていないみたいだ。

主役である真吾と、平井はマイペースな奴だからきつと遅れてくるだろう。

——10時。

「おお悪い悪い」

真吾と平井は一緒に来た。

「ううん。待ってないよ」

照れくさそうに笑う有泉。本当に嬉しそうだ。

「それじゃ行くか!」

ゴーカートに、ジェットコースター。お化け屋敷に……っという
るなもので遊んだ。

真吾がジェットコースターにハマリ、5回も乗った。

さすがに5回も乗ると酔った。

お化け屋敷では、怖いものが嫌いらしい有泉は叫びまくってた。

で、最後にたどりついたのが……観覧車。

デートの定番である。

「二人で乗ってきなよ」

有泉は言う。

真吾と平井はうんうんと頷いて、二人一緒に乗って行った。

その姿を俺たちは見守る。

「楽しそうだね。二人とも」

ぽつぽつと呟いた有泉。それに俺は。

「ああ。そうだな」

と相槌をうつ。

有泉の顔を見てみると、泣きそうな顔をしていた。

俺は有泉を無理矢理、観覧車に乗せた。

この姿を誰にも見せたくなかったから。

「ねえ。藤堂君」

有泉は静かな声で俺を呼ぶ。

有泉とは向かい合わせに座っている。

「うん？」

俺も静かに答えた。

「知ってた？」

「何を？」

「僕が、タツのこと好きって言うこと」

俺は肯定も否定もできず黙り込んでしまった。

知っていた。

そんなことをいったら有泉がどんな思いをするだろう？

そう思ったら答えることができなかった。

「知らなかったというより、もしかして僕のこと軽蔑した？」

「するわけないだろう！！」

俺は席を反射的に立ってそう言った。

それに驚いたらしい有泉は目を瞠っている。

軽蔑なんかしない。だって俺は……。

「どうしてそんなふうに言っただ！！」

それに言い返すように、有泉も立った。

「だって、普通そう思うだろう！？男と男なんて！！」

「そんなこと思わない」

「どうして！？」

——だって俺も男が好きだから。有泉のことが好きだから。

それが本心だ。でもそれは言えない。

「……もし俺が有泉を軽蔑するなら、真吾と平井のことも軽蔑するはずだ」

それを聞いた有泉は落ち着いたのか、また椅子に座った。

有泉は目をこすりながら、ぼつぼつと語り始める。

「僕がタツを好きになったのは、今年の春のこと。友達の作り方を知らなかった僕に声をかけてくれたのがタツだった。いつもタツが僕の所に来てくれるようになった。ただ単に嬉しかった」

でも……、つと話を続ける。

「……ある時タツが誰かと喋ってるところを見たとき、なんか心^{こころ}がね痛くなっただんだ」

有泉は自分の胸を抑えつけた。

「これが恋ってその時自覚したんだ。初めてこんな気持ちになった

から動揺した」

俺も。

俺もそうだ、と心の中で頷いた。

初めての恋でどうすればいいのかわからず動揺した。

「それに、この気持ちに気づいた時にはもう、タツと宮沢君は付き合っていたんだ」

そうだったのか。だから有泉は平井に自分の気持ちを言わなかったんだ。

「心が苦しくなっていくばかりだった。いつそタツのことを嫌いになればいいのに、って思ったこともある」

俺は頷きながら有泉の話を聞いていた。

口挟んではいけないと思ったから。

「でも、やっぱりタツのことが好き。この気持ちはまだ消えてくれない」

あれ……？

何か憶えがある……今の言葉。

「辛い。僕はタツのことが好きなのに。タツは宮沢君が好き。宮沢君もタツが好きで、両思い。辛いよ。見てるだけは辛いよ」

有泉の手が震える。涙が今にも落ちそうだ。

……この言葉も憶えがある。

全部俺が思っていたことと同じだ。

有泉への気持ちが消えてしまった方が楽だろうなって思ったことがある。

有泉が平井のことが好きって気づいた時はとても辛かった。

そうなんだ。

俺と有泉は同じことを悩み、苦しんでいたんだ。

——本当に俺は馬鹿だ。

自分だけが辛いと思っていた。自分だけが苦しいと思っていた。

有泉も同じだった。

有泉も辛くて苦しんでいたんだ。

「好きだよ。タツのことが。どうすればいいのかな？この気持ちをどうすればいいのかな？」

有泉の頬には、きれいに輝くものが流れていた。

どうすればいいのかわからなくて俺に訪ねてくる声がとても切なく愛しくて。

「ええ？どうしたの藤堂君」

俺は無意識に有泉を抱きしめていた。

有泉は俺の中でもがく。

大丈夫だって。俺も同じだからって言いたくて。

俺は強く抱きしめた。

すると突然有泉が大人しくなった。

有泉の顔を覗くと、有泉はなぜかうつすら笑っていた。

「ありがとね、藤堂君。いろいろ言ったら何かすっきりした」

なにも言わないでくれ。

お願いだから。

これ以上話さないでくれ。

言ってしまいたくなる。俺の気持ち。

「藤堂君？」

不思議そうに俺を見る。

「なんで藤堂君が泣いてるの？」

「ええ……？」

有泉が俺の頬に手を伸ばし何かを拭いた。

それは俺の涙。

いつの間に涙がこぼれたのだろう。

「なにかあったの？藤堂君も」

そう言われると、俺も話したくなった。俺が恋をしていること。

そして……。

「失恋したんだ」

つといることを。

「ええ？」

有泉は目を見開いた。

「失恋したんだ、俺もついさっき。……だからお前の気持ちがよくわかる」

そう言った瞬間、有泉が俺の背中に手をまわした。

暖かく抱きしめてくれる手がとても気持ち良くて、また涙がこぼれた。

「そっか。藤堂君も辛かったんだね」

うん、っと俺は頷いた。

——俺たちは観覧車が一周するまで、泣きながら言葉を交わさず、ずっと抱きしめあっていた。

11・今はこのままで…

——あれから約四ヶ月が経ち^た、俺達は高校二年生になった。

俺は有泉と同じクラス。真吾は平井と同じクラス。

平穏な日常生活を送っていた。

変わったといえば、あれだろうか？

「……と…」

声が聞こえる。俺を呼んでいるのだろうか。

「健斗——！！！」

有泉が俺のところ走到了きた。

「どうしたんだ俊也。そんなに走ってきて」

有泉のことを『俊也』、俺のことを『健斗』って名前で呼び合うようになった。

それもこれも、あの出来事があったから変わった。

他人。友達。親友。

少しずつ、俊也に近づいている

そう思っている。

——俊也は俺のこと、どう思っているだろうか。

仲良くなったが、俊也の中にあるものは見えない。

——俊也の心は少しでも癒えたのだろうか。

あの話をあれ以降していないからわからない。

まだまだ知らないことだらけだ。

知りたい

また違う感情が生まれる。

俊也と一緒にいると、知らなかった感情が生まれてくる。

『好き』

『苦しい』

『悲しい』

『辛い』

『愛しい』

全部、俊也に恋してから知った感情。

「好き」

って、俊也に言ってしまいたい。

でも、駄目だ。俊也の心の傷が癒えてるかわからないから。

……。

……いや、違う。そうじゃない。

俊也がもし、まだ平井のことが好きだったら。

告白して振られたら。

俊也を話すことができなくなったら。

『怖い』

そう思うからできないのだ。

少しでも強くなったかと思っていたけど、全然変わっていない。

俺はまだまだ弱い、小心者のままだ。

いつか言える日が来るだろうか。

俊也に本当の気持ち。

……今はこのままでいい。

この平穏な日常を、手放す勇気が俺にはないから。

「このままでいい」

12・桜と松澤がくれた勇気

「うわぁーーーーー綺麗!」

「そうだな」

「食い物日和だな」

「食い物かよ」

俺達四人は、学校近くの公園で花見をしに来ていた。

「なあなあ。あれ見てみるよ!」

真吾が指さした先にあるのは、大きな桜の木、通称デカザクラ。樹齢500年だそうで、とても大きいから俺たちはデカザクラと呼んでいる。

デカザクラの花びらが風にのって綺麗に舞っている。

「じゃあ食い始めるか」

「かんぱーい」

そう言った後、みんなでぐぐつとジュースを飲んだ。

みんなで沢山お菓子を持ってきたのだが……

15分後、あっという間にお菓子は無くなってしまった。

原因は真吾と松澤。

「お前ら食いすぎだろう」

真吾と松澤はなんか競争しているみたいで、両手にお菓子持ちながら食っていた……口に詰め込んでいた。

俺は呆れたが、俊也はどうやら違っただけらしい。

「宮沢君もタツもよく食べるね」

俊也は少食だから、逆に感心したみたいだ。

「俺はタツには負けたくないんだ!!」

「俺もだ!!」

二人とも運動部ということもあって負けず嫌いだ。

「どっちが勝った？」

二人は訊いてくる。そんなところ見てるわけもなく、

「知るかよ」

と俺は言ったのだが、またまた俊也は違っただけ。

「宮沢君の勝ちだよ。タツの方が10個分少なかった」

そんなところ見てたんだな、と俊也に感心したくなった。

——この頃思っただが、俊也は結構天然ということがわかった。

俺は鈍感らしい（真吾に言われた）から中々気づくことができなかったけど。

俊也って別に気にしなくてもいいようなこと気にすることがあったり、突然意味不明なことを言い出したり。

でも、そんなところが可愛い。

だんだん俊也のこと知っていくにつれ、だんだん好きになっていくのも感じる。

まだお菓子を食い足りない真吾が提案した。

「お菓子調達しようぜ。じゃんけんで」

みんな頷いて、

『最初はグー、じゃんけんぽん!!』

俺と待つ座wがパーで、真吾と俊也はグー。

真吾と俊也が負けたので、コンビニに買い出しに行った。

「なんかあの二人がいなくなると静かになるよな」

「ああ。そうだな」

「……」

二人の間に沈黙が流れる。

あまり話したことがないから気まずいのではなく、このままの方が気持ちがいいのだ。

なぜかわからない。でも、穏やかな感じがする。

何分が経った頃、松澤が突然呟く。

「なあ。あのジnkクス知ってるか？」

ジnkクス？何のジnkクスだと訊くと、

「デカザクラのジnkクス」

「知らないけど」

そう言うと、松澤は語るように話し始めた。

「このデカザクラの下で告白すると、恋が実るんだ。でも、桜の咲くこの時期だけ。他の時期にしても恋は実らない。それはこの桜

の木に力があるからだ。桜が咲いている時だけ木に力が宿ると言われている」

俺は素直に驚いた。松澤がこんなにロマンチックなこと言うとは思わなかった。なんというか松澤って堅物ってイメージがあったから。

「もしかして松澤はここで真吾に告白したのか？」

ちょっと茶化すように言ってみた。どう答えるのか聞いてみたくて。

いつもなら無表情で首を横に振りそうだと思っていた。

でも違うんだな。

「ああ。ここで告白した」

松澤はデカザクラを見ながら目を細めた。

きっとその時のことを思い出しているのだろう。

真吾は幸せ者だ。こんなにも松澤に想ってもらえて。

「羨ましいよ」

つい、本音が出てしまった。

——告白できる松澤の勇気が羨ましい。

——お互いを想って想われることが、羨ましい。

「藤堂、俺な。今この時期じゃなければ恋は実らないっていたけど、それは違うと思うんだ。なぜかというと、俺は真吾にここで【夏】に告白したんだ」

「ええ？」

夏に告白して松澤と真吾の恋は実ったって……。

「だから頑張れよ！怖いなら、桜が咲く時期にここで……お前なら大丈夫だ」

俺の目を見て真摯に言ってくれた松澤。

やっぱり松澤は俺の気持ちに気付いていたんだ。

この話をしたのは、俺も告白しろという意味なのだろう。

松澤は俺に勇気をくれた。

怖がらず、前向きに行け　という勇気を。

「ありがとう、松澤」

「ああ」

俺達二人は、微笑んだ。

「お——————い——！」

俊也と真吾は、走ってきた。二人とも両手に大荷物。

何を買ってきたんだ？袋の中身を見ると驚くべきものが入っていた。

「何だこれ？？」

そう口にするように、何だこれ？というものが入っていた。

三角帽子に、眼鏡。つけ鼻に、どでかいリボン。

どう見てもそれはお菓子ではなく、お祭りで使うような仮想道具が入っていた。

これをどうするんだよ？？と目で問うと。

俊也と真吾は面白そうに笑った。

「パーティーだよ。パーティー！！」

「何のパーティーだよ？」

そう訊くと、なぜか平井まで笑いだした。

訳わからない俺は、瞬きをするのを忘れ、ただ呆然としていた。

「とにかく来てのお楽しみ！！」

と言って、俺は何処かに連れていかれた。

13・俺のために。

「お誕生日おめでとう!!」

真吾の家に入った途端。三人は言った。

「はあ？」

何ですかこれは。まだまだ混乱中の俺は呆ぼろけていた。

俺の表情を見て、真吾は呆あきれるようにため息をつく。

「お前のことだからそうだと思ったよ。今日、お前の誕生日だろ？
4月24日」

誕生日。4月24日……・ああ。

「ああ、そう言えば。今日は俺の誕生日だ」

すっかり忘れていた。

平然と言う俺に真吾はまたまたため息をつく。

「少しは感動したとかないのかよ」

誕生日にいい思い出なんかないから、そんなことを言われても困る。

「玄関に立っててもなんだから、中に入ってよ」

楽しそうに言う俊也に真吾は突っ込む。

「ここは有泉の家じゃねーよ。俺の家だ。お・れ・の・!」

「いいじゃん!」

二人は睨みあってる。

まあまあと二人を落ち着かせて中に入った。

奥に行ってみると。

「あ……」

『健斗お誕生日おめでとう』と書いてあった。その他に部屋ほかの周りには、折り紙で作ったわっかが飾り付けられていた。

テーブルの上には沢山のご馳走。チキンに、ピザ。フルーツにケーキ。

何かクリスマスみたいだなと思うようなものばかりだ。

「早く椅子に座ってよ!」

俺は椅子に座った。

三人は俺を見て、

「お誕生日おめでとう」

と笑って言った。

「さっきも言っただろ」

ぶっきらぼうに言ってしまうのは単に照れてるだけだ。それを三人は知っている。

何か気まずい雰囲気を変えようと違う話題を持ち出す。

「これはなんだ？」

俺が指さしたのは、なんか焦げている正体不明のものだ。

実はさっきから気になっていた。

見た目は、焦げたパン？みたいなのだが……。

食い物かすら疑いたくなるものだ。

「それはリンゴパイ」

俊也が得意げそうに言った。もしかして……。

「俺が作ったんだ！！自信作　おいしそうでしょ？」

「ああ……」

平然とした答えに、俊也はムツとする。

「なにその反応！―！せっかく健斗のために僕がパーティ企画したのに」

……ええ？

俺は一瞬、目を瞠る。

「俊也が企画してくれたのか？」

「そうだって言ってるじゃん！―！」

頬を膨らませて怒っている俊也。

俺のために一生懸命企画してくれたのがよくわかる。

「そうか、有難^{ありがと}な」

なぜか素直に気持ちを伝えることができた。

俺がほほ笑んで言うと、俊也の顔がリンゴのように赤く染まった。

照れてるのか？

可愛らしいな。

…男に言う台詞^{せりふ}じゃないのはわかってるから言わないけど。

「べ、別にいいけど。健斗が喜んでくれればさ」

「嬉しいよ。有難う」

一回言ってしまえば素直に自分の気持ちをすんなりと言える。

こんなに簡単なことだったのかと疑いたくなるほど。

「食べてよ、僕の作ったリンゴパイ」

恥ずかしそうにリンゴパイを皿に取ってくれた。

「ああ」

俺はリンゴパイをおそろおそろ一口食べてみた。

「どつ?」

俊也は心配そうな目で俺を見てる。

さっきまでの自信は何処にいたのやら。

「美味い……」

「本当!?!」

「本当だ」

俊也は嬉しそうに笑っているが、真吾と平井は本当かよって目をしている。

俺自身も最初、これは本当に食いもんか？と思ったがお世辞抜きで
凄く美味い。

少し焦げてるところもあるけど、パイは温かくてパリパリしている。

二人も俊也のパイを口にして呟く。

「美味い」

「すげーうまいぞこれ！！有泉すげー」

俊也は照れてずっと下を向いている。

「練習した甲斐があったな」

「うん！」

嬉しそうに頷く俊也。

——練習してくれたのか。

俺だけのために、こんなに一生懸命になっってくれるなんて……。

俊也が俺だけのために何かしてくれたこと、考えてくれたことがとても嬉しかった。

14・デート!?

「あつっーい」

今日はプール開きの日。春は過ぎ、季節を夏へと変えた。

俺達はプールの中の掃除をしている。

「健斗。暑いよぉー!」

「ああ。そうだな」

俺はそっけなく返事を返す。

「なんで健斗はそんなに涼しそうなの？」

本当に不思議そうに訊いてくる。そんな天然な所が可愛くて、つい笑いそうになってしまう。

「涼しそう……じゃなくてそうでも考えないと、こんなところにいられるわけないだろ？暑い暑いばかり言ったら、余計に暑くなるだけだ」

「そうだけどさ……」

何か言い足りないらしい俊也は、口をとがらせてムツとしている。

そう言えば俊也はアイスが好きなんだよなあ……。

思いだしたことをいいことに、俺はこう問いかける。

「これ終わったらアイス食いに行こうか？」

「うんうん行こう！！」

目を輝かせる俊也。

これはいい感じに持って行けそうだ、っと思ったのに……。

「駅前にあるアイスクリーム屋さんにしよう！！あそこまだできたばかりだけど、すごく美味しんだよ♪そうそう——」

掃除そっちのけで俊也はアイスの話 시작했다。

早く終わらせるため……早く二人っきりになりたいからそう言ったのに、この調子だと逆になかなか終わらなそうだ。

と苦笑した俺だった。

「うんまーい!!」

「ああ。美味^{うま}いな」

俺達は駅前のアイスを食べながら、ぶらぶら歩いていた。

——このアイスは本当に美味い、お世辞抜きで。

「でしょでしょ？健斗の何味？」

「チョコ味」

実は俺、結構甘いものが好きで……特にチョコレートは好きだ。

外見からして「ギャップがありすぎる」「っと真吾に言われたので、他の奴は知らない……」と思う。

「うん、じゃあ貰うね」

「はあ？」

ええ……ちょ…っちょつと!!

そう動揺しているうちに、俊也の顔は近付いてくる。そして、俺のアイスをペロリと……。

「ああー、凄く美味しいな」

俊也は平然と感想を述べた。

そう言う問題じゃないだろ！！だって、だって。

——今の間接キスだろ！？

友達相手なら関係ない？結構普通にする？そんなことはどうでもいい！！

俊也が俺のアイスを舐めた。俊也が……。

混乱した俺の思考回路は完全にショートした。

「どうしたの？」

突然黙った俺を見て不思議に思ったらしく、少し不安そうな目をしている。

「だ、大丈夫だ！！」

「そう？それならいいけど……あっそうだ」

俊也はとんでもないことを言ってくる。

「健斗も食べる？僕のアイス。いちごミルクチョコレートアイスなんだけど」

「い、いらなっ」

動揺のあまりに、片言になってしまふ。

「えゝ美味しいのに」と勧めてくるが、俺は断った。

——か、か、間接キス……。

そのことがまだ、頭の中でぐるぐる回っている。

深呼吸をして落ち着こうと試みる——が、さらに俊也はとんでもないことを言う。

「なんか、デートみたいだね、手でもつなぐ？」

「ええ!!」

今のは冗談だったろうが無かろうが、心臓に悪い一言だった。

落ち着くどころか、さっきより脈が速くなってる。

思いつきり動揺した俺を見て、俊也は面白そうに笑う。

「今の反応、何？凄く面白い!!」

いつも拗ねるのは俊也だが、今日は俺の方が拗ねたい気分だ。

「珍しいな。健斗が拗ねるなんて。たまにはこうゆうのもいいかも」

楽しそうに鼻歌まで歌いだした。

——俊也に格好悪い姿見られるし、
揶揄われるし、今日は最悪だ。
と、沈みまくった健斗であった。

15・決心

「怖い怖い怖い。ギャーーーーー!!」

夏休みに入ったので、遠くの遊園地まで遊びに来ていた。

夏の定番と言ったら「お化け屋敷」ということで、俺達今、お化け屋敷にいます。

メンバーはいつもの四人。

「有泉の反応はいつも見ても面白い」

真吾は俊也をおちよくっている。

「み、み、宮沢君だってさっき怖いって言ったじゃん!!」

俊也は肩をガタガタ震えながら、必死に反論する。

暗いからはっきりと見えないけど……。

そして、違う意味で肩を震わせているやつが一人——平井だ。

「……俊也、本当にホラー系駄目だな。嫌なら入らなきゃいいのにな」

「だって……」

俊也は黙ってしまった。

わかってるつもりだけど、認めたくないんだな。

……ちょっと揶揄うつもりで言ってみた。

「まあー俊也のことはどうでもいいから、早く出ようか？」

「ああ！健斗まで酷いー！！」

俊也は、頬を膨らます。それを指でつついてみると、息がゆっくり漏れていく。

「藤堂。俊也で遊んでないで、行くぞ」

「ああ」

「タツまで……、ああーもう……」

俊也が落ち着こうとしたときに、真吾が何処かを指差し、わざとらしく叫んだ。

「ああ！あそこに骸骨^{ガイコツ}が！？」

「ええっ！？ギャー！！！！」

混乱した俊也は、俺の腕を思いつきり掴んで、顔を伏せている。

痛いと思っただが、怯えている俊也を離せるわけがなく……俺はただ、じっとしていた。

俊也は危なっかしいから、俺がずっと守ってやりたくなる

——俺の中の俊也への気持ち、益々大きくなっていくのを感じた。

お化け屋敷を出て30分。

「怖かったよお」

まだ俊也は怯えていた。いまだ俺の腕を離さない。

「大丈夫だ。もう終わっただろ？それに男なんだから、これぐらいで怯えるな」

「わかってるけど！」

俺達のやり取りを見て、平井が呆れた顔をしながら訊いてきた。

「ほらほらその辺にして……何飲むんだ？俊也はオレンジがいいんだろ。藤堂は？」

「俺は、そうだな……炭酸系なら何でもいい」

「わかった。俺と真吾で買ってくるから、お前らはそこで待っていてくれ」

「ああ、わかった」

「了解です」

二人はジュースを買いに行った。

俺と俊也はその辺のベンチに座った。夏だから立っているだけでも疲れるし、だるくなるし。

俊也は自分の手で風をあおぐ。

「暑いなあー。どっか涼しいところない？」

俺は呆れて、大きなため息をつく。

「だから、お化け屋敷に入ったんだろう」

「そっそう意味じゃなくて!!」

『お化け屋敷』という単語を聞いただけで、また怯えだした。

動揺の仕方が可愛くて、思わずクスツと笑いそうになる。俺の表情を見て、俊也はそっぽを向いた。

怒ってるのかと顔を覗き込んでみると、予想と違って俊也は遠くの何かを見るような、不思議な表情をしていた。

どうしたんだ？と訊いてみると、突然俊也はこんなことを言い出した。

「ねえ……今年の夏休みで遊びは終わりだね。来年は受験だし」

「ああ？……そうだな。来年は受験だな」

話の意図は分からないが、なんとなく頷いた。

「健斗はこの大学に行くの？頭良いからどこでも行けそうじゃん」

「まだわからない。それに俺、頭なんかよくない」

そう。勉強はできても、頭なんてよくない。だって、俺は……。

俺が思うことを打ち消すように、俊也は俺を見て勢いよく言った。

「そ、そんなことないよ！！僕、すごく尊敬してるんだよ！！」

……。

俊也から褒められたことがなかったので、思いっきり赤面してしまった。

不意打ちだ。

……何か、くすぐりたい。

俊也が俺のことそんな風に想っていたくれたなんて知らなかった。

「有難な」

「ええ？あ……うん」

礼を言われるとは思わなかったらしい俊也も、同じように顔が赤く
なった。

照れてるのか、下を向いて頭を掻^かいている。

どちらとも話すタイミングがなくて、ただずっと黙っていた。

——その微妙な雰囲気を壊したのは、知らない男性だった。

彼はとても大きくて、身長は180センチは優に超えているだろう。
眼尻にあるホクロが目につく。

俊也のことを知っているようで、馴れ馴れしく話してかけてくる。

「君、有泉俊也君だよね」

さっきまで下を向いていた俊也は、彼の方に顔を向けた……その瞬
間、さっきの顔が嘘のように顔が真っ白になった。

俊也は言葉が出ないらしく、口をパクパクさせている。

「やっぱり俊也君だ」

彼は何かニヤニヤしていて気味が悪い。

「ぼ、僕は違います！ーひ、人違いじゃないですか！？」

あからさまに動揺した俊也を面白そうに、彼は見ている。

俊也はさっきとは違う何かに怯えているようだ。

「嘘が下手だね。昔と変わっていないな、俊也くん……クス」

「だから僕は違いますって！ー」

俊也の言ってることを聞いてないかのように離し続ける彼。

「俊也君、嘘はやめなよ。僕たちは中学校の【ともだち】だよ？忘れたなんて言わせないからね……ふふふ」

——何だよ、コイツ……っ！ー！

嘲笑うような笑み、口調。

それに腹を立てた俺は、こう言い放った。

「すみませんが人違いじゃないですか？俺らはこの辺で失礼します」

俺は手を俊也の肩にのせ、彼がいる反対方向に歩いた。

「違う違う違う……」

俊也は機械のように「違う」と言い続ける。

抱きしめて安心させようとするが震えは止まらない。

これは尋常^{じょうじょう}じゃない。

そう思った俺は、すぐに平井に連絡をとった。

「どうしたんだ!？」

平井と真吾は全力疾走で駆けつけてくれた。

「俊也が……」

さっきあったことを全部話した。中学校の友達というあの人のことを。

その話を聞いた平井は、俊也に呪文のように言った。

「大丈夫、大丈夫、大丈夫」

「だいじょ……ぶ……」

少しずつだが俊也の震えはおさまってきた。

俊也は俺の背にしがみつく。

「健斗……けんとお……」

涙声で俺を呼ぶ俊也に、胸が苦しくなった。さっきよりもギュッと強く抱きしめる。

……俊也。そろそろ言ってもいいだろうか？

俺の気持ちを。

けして怖い気持ちがないわけじゃない。

嫌われるかも知れない、もう話くれなにかもしれないと不安はある。

でも、言わなきゃ俺の気持ちは伝わらない。

「俺が俊也を守りたい」

——そして、

「好き」

って自分の気持ちを俊也に聞いてもらいたいから。

——俺は告白する決心をした。

15・決心（後書き）

だらだらと書いてしまったので、読みにくい部分が沢山あると思います。

すみませんm（――）m

「好き」と言ってもいいですか？は、もう15話目に突入しました！！

今、書いて気づいたんですが「好き」と言ってもいいですか？って題名長いすよね……。

何かいい呼び方がありましたら、お願いします！！

まだまだ続きがありますので、よろしかったら読んでください。感想もお待ちしております！！

16・二人の過去―前編―

夏の終わりを告げたのは、テストだった。

「健斗教えてよ！！これ何??」

俊也は困ったように俺に訊ねてくる。

「これは、ここどこを掛けて……うん、そうそう……で。ここは公式を覚えないと駄目だろ」

俺達、只今勉強中。

俺はまあまあできるからいいけど、問題は俊也だ。数学が苦手みたいで、全然わかっていない。来週がテストなのに大丈夫なのか。

「あ！！できた！健斗できたよ！！」

問題が解けて喜んでいる俊也を見ると、俺まで嬉しくなる。

「健斗って教え方上手いよね」

「ああ。そうか？普通だけだな」

俺は下を向いた。

照れ隠しで、そっけない言い方になってしまつ。

言えるときは言えるのにな……。

あの時のように

——夏休みの遊園地に行ったとき。

「尊敬してるんだよ」という言葉に「有難う」って素直に答えることができたのに。

……いつもの俺は、本当に情けないな。

はあ……とため息をつこうとした時、俺の頭上から誰かの声が聞こえた。

「それは俺の教え方が下手と言いたいのか。有泉君」

上を向くと、わざと怒った顔を作った平井がいた。

いつもニコニコしてるのに、こんな時だけ怒る平井のことを、俺は「ダーク平井」と呼んでいる。これは真吾が命名した。

「タツ先生の教え方はずっと上手いんですが……先生の性格に問題がね」

俊也もわざとらしくため息をつく。

「ほほう。どんなところが言ってみなさい」

「そうゆうところ……」

面白そうに二人は笑っている。

……俺的には面白くもなんともないが。

理由はわかってる。

平井に 嫉妬 してる。

ということだ。

なんで今俺と話してないんだろうとか。

何度も思った。何度も考えても、これは嫉妬心としか言いようがない。

平井は何か閃いたように、手をポンと叩いた。

「そうそう。今日はちょっと藤堂に話が合ってたな。暇か？」

「ああ。いいけど」

「ちょっときてくれないか」

さっきまで笑っていた平井の顔が、なぜかこわばっている。

「わかった」

俺と平井は俊也を教室に残し、屋上に向かった。

屋上には生徒は立ち入り禁止だが、今日はなぜか開いていたみたいだ。

平井は平然と、屋上の階段を上って行く。

「はいつていいのか？」

「ああ。大丈夫だろう。なんかあったらごまかせばいい」

平井らしくない言葉。

そう思いながらも、俺は平井の後をついていった。

「……………」

屋上についたはいいが、平井は中々口を開こうとしない。話しくいのかと思い、俺から声を掛けてみた。

「どうしたんだ、突然」

一目おいて、平井は口を開いた。

「俊也のことなんだが…」

俊也のこと？それは一体何のことだろう。しかも、「俊也なし」で

話すことって……？

いろいろな不安がよぎる。

平井は俺を見てから、重く口を開いた。

「アイツ、実は……恐怖症なんだ」

ええ……俊也が恐怖症？？

17・二人の過去―中編―

「俊也が、恐怖症だって言うのか？」

「そうだ。詳しく言うと、男性恐怖症」

男性恐怖症……。

信じられない。だって俊也いつも明るくて笑っていて。

「軽度だけだな。俺とか真吾とか藤堂とかとは喋れてるだろ」

「でも」つと話を続ける。

「アイツが他の男と喋ったところを見たことあるか？」

——
ない。

平井とよく話しているの見たことあるけど、クラスメートと話してるところを見たことがない。男性の先生とだって話してるところを見たことがない。二年になってからは俺としか話してなかったはずだ。

「一番初めに一緒に勉強会しただろう。あの時俊也、お前にもものすごく怒らなかったか？」

一番最初の勉強会。忘れたことのない思い出。

あの時、俺が少し笑っただけなのに、なぜかすごく冷たい声を出さ

れたのを覚えている。

それ以上に俊也の悲しそうな表情が印象に残っている。

そのことか？と訊くと平井は頷く。

「あれは俺もびっくりしたんだ。俊也があんなに冷たい声を出すなんて…」

少ししゅんとした俺。それを察したかのように話を続ける。

「そういう意味じゃない。俊也が藤堂を嫌ってるってことが言いたいんじゃないんだ。俊也が人にはつきりしたことを言うのを初めて聞いたってことに驚いたんだ」

どうゆうことだ？訳がわからず首を傾げる。

平井はしょうがないとばかりに口を開く。

「俊也が男性恐怖症になったのは原因があるんだ」

「原因？」

次に平井が発した言葉はあまりにも衝撃的だった。

「アイツは中学校の時、男友達に輪姦りんかんされたんだよ」

輪姦？！

俺はその言葉に、絶句した。

輪姦^{おか}って一人の人を大勢で犯すっていう……？

いわゆる集団レイプか？

「中学校が同じ奴はみんな知ってる」

俊也にそんな過去があつたなんて知らなかった。

「あの時……夏休みの時、眼尻にホクロがあつた奴がいただろ。そいつが輪姦した中の、頭^{かしら}にいた奴だ」

——アイツが俊也を……っ！！

そう思うと頭に血が上った。だが、今、俺が怒っても仕方がない。

怒りを自分の拳に潜めた。

「アイツはずっと苦しんでいるんだ。男の人が怖いって……でも、お前は違つたんだな。俊也が男相手に怒れるということは、藤堂のことを信頼してるからってことだろ」

「そうだといいんだが」

自嘲気味に言うつ、平井は首を振ってくれた。

「藤堂だからにこの話をしたんだ。……だから」

一瞬、詰まっつてこつ言つた。

「……俊也を守ってやってくれ。俺にはもうできないから」

——もしかして、平井は俊也の気持ちを知っていたのかもしれない。

だからこうやって俺に託そうとしているのだ。

『タツには宮沢君がいるから……』

そんなようなことを俊也は言っていた。

「お前ならできる」

その言葉は嬉しいはずなのに、喜べない自分がいる。

俺は平井の言葉を【絶対】に裏切ってしまうから。

平井の言葉には、「俊也を幸せにしてやって」と意味がある。

俺にはできない。

告白する決心をしたのに……。

でも俺はその資格がないことを今、知ってしまったのだ。

俊也を幸せにできないわけ——それは、俺の過去が関係していた。

18・二人の過去―後編―

——話した後、俺達は別々に屋上を出た。

俊也にいろいろ聞かれないためにだ。俺は嘘が下手だから悪いと思ったが、全部平井に任せた。

どうすればいいのだろう……。

俺の過去が思い浮かぶ。

俊也には聞かれたくない過去が。

——沢山ありすぎる。それなのに、俊也が輪姦で男性恐怖症だなんて……。

俺は階段を降りる足を止め、そこに座りこんで頭を抱えた。

俺の過去、それは悲惨なものだった。やってることは俊也を輪姦した奴らと同じようなことだ。

あれは、5年も前、俺が中学2年の時のこと——俺には彼女がいたんだ。綺麗で大人しい子だった……

「付き合ってください」

「ああ、いいよ」

告白されたのは、もう何人目だろう。

俺は、告白を断るのがめんどくさくなったので、しょうがなくOKしたのだ。

それに一回付き合えば、他の女から告白されることもないだろうし。そんな簡単な気持ちで付き合った。

「ねえ？藤堂君」

「何？曜子ようこさん」

今、学校から彼女、北村曜子きたむらやうこと一緒に下校中。

クラスは一回も同じになったことはないのだが、なぜか好きになったのだという。

「藤堂君は、抹茶とか好き？」

「ああ。まあまあ……」

曜子さんはその答えに満足したかのようにうんうんと頷く。

「やっぱり！！私のイメージ通り。渋いものが好きそうだもんねえ……」

どこが？イメージ通りだよ？俺、本当は渋いものが大嫌いだし。甘い物の方が好きだ。

これだから嫌だったのだ。

「こうじゃないと駄目」「こんなの藤堂君じゃない」と勝手に俺のイメージを作り上げようとする。

俺はうんざりしていた。

そんなある日……。

「おい、藤堂……この頃、曜子さんと付き合ってるんだって？」

いつも話しかけてこない奴が、突然話しかけてきたのだ。

確か……篠原だっけ？

「ああ……そうだが」

「何で付き合ってるんだよ？」

「なんとなく……だけど」

実際なんとなく付き合っていたので、そう言った。別に付き合いたかったわけじゃないし。

すると、篠原は俺の机をバンツと叩いた。

「俺の女、とつてんじゃねーよ!!」

篠原は俺をギツと睨めつけてから、ここを去った。

この時の俺は知らなかったのだ。

人の心をこんなにも傷つけてしまうことが恐ろしいということ。恋の力はとても強く激しいものだということを。

まだ知らなかった。

次の日……。

「おい健斗、大変だ!! 曜子さんがっ!!」

「ええ？」

「とにかく来いよ!!」

俺は真吾に引つ張られるまま、後について行った。

「曜子さんがどうしたんだ？」

「……………」

訊いてみるが、真吾は口を開こうとしない。不審に思ったが、真吾の顔がとてもつらそうなものだったので俺は口を出さなかった。

それにしても曜子さんがどうしたんだろう？

不安がよぎる。

「おい。ついた」

そこは保健室。トントンツとドアを叩いた。

保健室に入った瞬間、俺は驚いた。

「曜子さん？」

曜子さんは保健室の端で蹲りながら、泣きじゃくっていたのだ。

「曜子さん、どうしたんだ？」

近寄ってみると、陽子さんは怯えるように俺を見た。

「…………あい……」

「ええ…………？」

言葉が聞き取れなかったので、もう一度訊ねた。

すると、曜子さんの中の何かが壊れたかのように大声を出した。

「怖いっ怖いっ怖いっ！！！」

曜子さんはしゃがんだまま首をふり、ずっと「怖い」と叫んでいる。

隣にいた先生は曜子さんを落ち着かせようとしている。この様子はおかしいと真吾の方に目を向けと、来いっ！と俺の方に手を向けた。

保健室をいったん出て、真吾はゆっくりと語り始めた。

「曜子さんは篠原に強姦されたんだよ」

その言葉に俺は絶句した。

「強姦…………？」

真吾はうんつと頷く。

「お前と付き合ってる前、篠原と曜子さん付き合ってたみたいなんだ。篠原は納得していなかったみたいだけど、陽子さんが健斗と付き合うことにしたから別れたそうだ」

「…………俺のせいだと言いたいのか？」

俺は真吾に怪訝の目を向ける。

これを聞いていると俺のせいだと言ってるようだ。俺が二人を別れさせたって。

「別にそう言ってるわけじゃない。ただお前がはつきりしなかったからいけないんじゃないのかと言ってるだけ」

「俺がはつきりしてない？」

「そうだ。だってお前、陽子さんにハッキリと「好き」って思ったことあるわけ？違うだろ？ただメンドクサイから告白をOKしたんじゃないのかよ」

「……………」

俺は何も言えなかった。真吾が言ったことが本当のことだったからだ。

ただ告白されるのがめんどくさいから、俺は陽子さんと付き合つのを承諾した。でもそれで他の誰かを傷つけるとは思いつかなかったんだ。

無責任なことをした。

俺はゆっくりと口を開く。

「そうだ。俺は……ただ自分のことだけで、曜子さんの気持ちを考えていなかった。しかも篠原のことを傷つけてるなんて思いもしなかった」

俺の言葉に真吾は苦笑した。

「お前らしくない言葉だな。でもお前のせいだけじゃない。曜子さんは彼氏がいるのにお前に告白したし、篠原はそんな曜子さんを無理やりやった。軽く言えばお互い様。二人とも傷ついているんだよ」

知らない。

知らない、俺は知らない。その気持ち。

自分のために人を傷つけてしまう。

好きで好きで傷つけてしまう。

恋って怖いんだな。

でも、そんなことを簡単に思って受け流してしまう俺の方がもっと怖い。

恋って何だろう？

このときの俺は恋を知らない。

その後……。

曜子さんは転校し、篠原は停学処分となった。

もちろん俺は何もない。

でも、自己嫌悪に陥ってしまった。

彼女の曜子さんが強姦されてしまったのは俺のせいだと。

俺がはつきりしない奴だったから……。

直接的に俺は関係してないけど、強姦させてしまったという気持ちが残っている。

だから、俺は俊也に後ろめたい気持ちを抱いてしまったのだ。

18・二人の過去―後編―（後書き）

書きたいこと書いて、話がぐちゃぐちゃになってしまいました。
すみませんm――m
アドバイスお願いします。

19・今の俺

俺は教室に戻った。あんなところにも悪い方ばかり考えるだろうと思っただからだ。

俺は、自分の席に座りじっと机を見つめていた。

「どうしたの？健斗」

不意に声をかけられてので、少しびくつと反応した。前を向くと俊也がいた。

俺の反応が面白かったのか俊也はふつと笑った。

「いや、何でもない。ちょっと疲れただけだ……」

俊也は一瞬何かを考え込んでいたみたいで、うんと頷いてからゆっくりを口を開く。

「そう……。ねえ、健斗。ちょっと話があるんだけど、今いい？」

「ああ……いいけど」

どうしたんだろうか。

俊也が怖い位、真剣な目で俺を見ている。それに話をするだけで、こんなことを尋ねてくる奴でもなかった。

いつもと違う俊也に戸惑いながらも、俊也の後について行った。

廊下は出たとき。誰か俺を呼ぶ声が聞こえた。

「おーーーーーい！！健斗！！」

後ろからやってきたのは真吾。走ってきたから息を切らしている。

「どうしたんだ。そんな大声出して……」

真吾は俺の肩を引っ張り、耳元で囁いた。

「……………」

「でれ」

「おい！！ここで話すことじゃないだろ！！」

俺は、慌ててその話を中断させた。

俊也が俺を不思議そうに見ているのに気付いていたが、今はどうでもいい。

真吾の話があまりにも唐突過ぎて混乱した。

「なあ？有泉。ちょっとコイツ借りていいか？」

「おい。何言ってるんだ。俺には先約があるんだ」

と断ろうとしたら、

「いいよ。僕の話は後でもできるし。宮沢君の話の方が重大そうだ

し……」

俊也は今はいいと断った。

「わりいな。じゃあまたな、有泉」

「ごめんな。また後で、話を聞くから……っおい！！引っ張るな！！」

俺は引きずられながら、またもや屋上へ行くことになってしまった。俊也がいつもと違ったことが気になったけど、それよりも真吾に言われたことが衝撃的だった。

「おい！！何であの話で俊也がいる場でするんだよっ！！俊也に聞かれたらどうするんだ！！」

あの話というのはさっき平井と話していたこと。そして俺が考えていたことだ。

多分俊也の過去を俺に話したことを平井は真吾にも教えたのだろう。

それにしても、あんなところで話さなくてもいいじゃないか！？

慌てている俺を見て、面白そうに真吾は笑った。

「だって、そう言った方が手っ取り早いと思ったんだ」

ちよつと拗ねて可愛いく見せようとしているみたいだが、今の俺にはそれに突っ込むような余裕は微塵もなかった。

「だって……じゃない！！一歩間違えれば俺は俊也に嫌われるところだっただろっ！？」

俺は真吾の肩を掴んで大きく揺さぶっている。

自分がとても混乱しているのはわかっている。冷静になろうとしても痛いところを突かれてしまつて落ち付けないのだ。

真吾はそんな俺の手を邪魔とばかりに離し、悠長に話しかけてくる。

「まあ……そんなに焦るなよ。大体はお前が悪いんだし……」

そう言われると何も言えなくなつた俺。

一歩引き下がる俺を見て、真吾は苦笑した。

「何度も思つたが、本当にお前変わったな。有泉に恋してから、まるで別人。可愛くなつちやつて」

最後の言葉は確実に揶揄の色がにじんでいて、それが面白くなかつた俺は真吾の頭をゴツンと叩いた。

俺は悪くない！！と反論する真吾だが、次の俺の言葉のトーンを聞いて、真吾も真剣な表情に変わった。

「どうすればいいと思うか？」

俺は問いかけた。

「有泉にこのことを知られない方法？」

うんつと頷いた。

俺自身が強姦に関わっていないとしても、やっぱり悪い印象が強いだろう。

『怖い』

何回も何回もそう思ってきた。俊也に嫌われるのが怖いって。

俊也には男同士の恋愛には偏見ないし、俺が告白しても嫌わないと俊也を仲良くなってから約10ヶ月。十分に分かった。

でも今回ばかりは違う。俊也の奥にとっても深い傷がある。

それを俺自身が思い起こさせたらと思うと、このことは秘密にした方がいい。

俊也自身のためにも、俺自身のためにも。

俺はそう考えていたのだが、真吾はどうやら違ったようだ。

「そんなに気にすることないと思うけど、お前はそう見えても弱い奴だからな。有泉はそんなに弱い奴じゃないと思うぞ。お前よりは

な」

それはどうゆうことだ？と目を向けると、自分で考えろっとなんの頭をつついてくる。

「それにな。言っという方がいいこともあるんだ。擦れ違いつてこともあるだろうし……」

すごく説得力のある言い方に俺は首を傾げる。

真吾も何かあったことがあるのだろうか？俺が知らないだけで……

真吾の顔はなぜか真っ赤になっている。何かを振り払うように首を振っていた。

「とっとにかくなあ！今の自分を存分に出せばいいと俺は思う。過去より今の方が大事だろ？」

「ああ。そうだな」

まだ、このことは俊也には言えないけど、今の俺を信じていけるといいと思う。

真吾の言葉でそうゆう風に思えるようになった。

「頑張れよ！！」

背中をとんとんと2回叩いてくれた。

俺は応援されてばかりいるな。と自嘲気味に笑った。

20・再スタート？

——昨日、真吾と話をした。

あの出来事で俊也に罪悪感がないわけではないが、真吾と話をして良かった。

俺は何でも悪い方向に考えるみたいだからな。

真吾みたいな前向きに考える人がアドバイスしてくれると、安心するし落ち着く。

まあー心機一転、再スタート。

……で、今は平井とお話し中だったりする。ここは平井のクラスだし……俊也に聞こえることもないからあれを訊くなら今がチャンスだ。

「平井……。俊也は何の料理が好きか知っているか？」

「はあ？」

昔のことを平井に話し終わったついでに、俺は俊也の好きな食べ物について訊いてみた。

冷たいもの——アイスが好きって言うの知っているのだが、家庭料理系で俊也が好きなものが浮かばないのだ。

「昨日、俊也とちょっと話し合う約束をしたんだが、話を真吾としたいからと言って断ったんだ……だからお詫びになんか俊也に手作り料理をしたいなあと思って」

「藤堂って料理できるのか？」

あまりに素早い回答に俺は少しだけ、カチンときた。

「できる。カレーとかチャーハンぐらいなら」

「意外だな。藤堂って不器用そうだから」

「……………」

平井って何でもズバッという奴だったか……？

俊也にはいろいろふざけて言っていたが、俺には言ったことがない。

悪気なく平然と言ってるのだとしたら、余計ムカつく。

「まあ。それはやめといた方がいいんじゃないか？アイツの親シェフだし……味煩い」

「シェフ？」

それ本当か？と訊ねると、逆に平井の方が驚いているのか、あれ？と頭を搔いている。

「俊也言っただけでなかったか？俺はとくに言ってると思ったが……」

「知らないが……俊也の親がシェフなのか？」

「ああ、父親がフランス料理のシェフ。母親はパティシエだ」

そうなのか……それはそれで納得した。

前、俺の誕生日に俊也が俺のために、りんごパイを作ってくれたことがあった。見た目は悲惨だったが、とても美味かったのを覚えている。

「あとアイツはなあ……」

「……何してるの？」

平井が俊也のことを教えてくれると話を聞いていたところに、とても冷え冷えとした声がさした。

「俊也……」

俺が言葉にした通り、冷え冷えとした声の主は俊也だった。

怖い目で俺を見ている。

勝手に俊也のことを聞いたから、怒っているのだろうか？

「だから、何してるの？」

また同じと問いを返されるが、怒っている理由が分からないから、どう答えていいのが困ったのだ。

俊也のことを訊いていましたと、素直に言ってしまった方がいいのだろうか？

「あのなあ……ええつと……」

俺が言葉に詰まっていると、平井が助け船を出してくれた。

「藤堂とはちよつと料理の話をしていたな。藤堂、カレーが得意らしい。今度作ってもらわないか？」

話を少し逸らそうとしてくれたのだが、

「タツには聞いてないんだけど？」

今度は冷たい視線を平井に向けた。平井も困っているらしく、俺に弱ったという視線を送ってくる。

これは確か、あの時——俊也と初めてした勉強会の時に聞いた声と同じだ。

とても怖く冷たくて、いつもの俊也ではなくなってしまったような……。

あの時よりも、険悪な雰囲気だ。

新しい気持ちで俊也とやっていきたかったのだが……どうも上手くいきそうもない。

——俊也。一体どうしたんだ？

21・拒絶

「俊也？」

「……………」

問いかけても返事をしない。

どうすればいいんだ？

こうゆう状態に陥ったことはあったが、あのときは直に仲直り（？）はしたし……。

「俊也。何がいけなかったんだ？俺何かしたか？」

確か真吾はしっかり話し合うことが大事だと言った。じゃあ訊いてみることも大事なのだろうか？

「……………」

それでも俊也は答えない。じつと下を向いて口を開こうともしない。

「俊也、何か言わないと藤堂も分からない。何をそんなに怒ってるんだ」

平井が言葉をつけたしてくれた。

俊也はゆっくりと顔をあげていった。

「もっ……」

表情はとても辛そうで、目をつつすら光ってる。

手はブルブル震えていて、何かに脅えている小動物のようだ。

——俊也の中で何が起きているんだ？

俺はこんなに怒る俊也も見たことはない。こんなに怯えている俊也も見たこともない。

どう話しかければいいのか分からない。

沈黙が続く。

何か嫌な目にあっただろうか？俺がいつの間にか俊也を置いて詰めていた？

それとも口を強く閉ざすほど、俺に聞きにくいこともあるのだろうか？

俺の中の不安は大きくなるばかりだ。

沈黙を破ったのは俊也だった。俊也は何か覚悟したのかのように真剣な目を俺の方に向けた。

「ごめん。健斗」

「ええ……？」

その言葉の意味が分からないと首を傾げる。

「ごめん、……健斗」

また同じ言葉を繰り返す。何度も何度も。

「ごめん、健斗。ごめん、健斗っ」

俊也に何かがとりついたかのように、同じ言葉を繰り返す。

俺は目を瞠った。平井も驚いているようだ。

俺達に瞠目されてるのがいたたまれなかったのか、俊也は逃げようとドアに向かって走るが、腕を引っ張ってなんとか俊也を止めた。

「ごめん、じゃ分からない。何ついて謝ってるんだ？」

俊也は下を向いて、俺の顔を見ようとしない。

何もかも俺の言葉を拒絶するかのように。

「離せっ！！」

突然、俊也は腕を振り回した。大声を出したから、周りのみんなが吃驚してこっちに振り向く。

「触るなっ！！」

周りのみんなは、あはははっと笑いながら俺達のやり取りを見ている。

俊也は、さっきよりも強く腕を振り回す。触るなって言われても「ごめん」の意味を知るまでは。

っと、俺も頑張つて俊也の腕を掴む。

痛くないだろうか？そんなことを考える暇なんてなかった。

必至に手に力を込めた………が、

「大っ嫌い！！」

そう言われた瞬間、俺は俊也の腕を掴んでいた手を緩めた。正確に無意識に緩んだ。

——好きな人に一番言われたくない台詞を言われてしまった。

『大嫌い』

その台詞はどんなに俺を傷つけただろう。俊也は知る由もない。

俺の体の力が全部抜けた。脱力した俺は床にしゃがみこむ。

そんな俺を見た俊也は、またさっきの言葉を繰り返す。

「ごめん、健斗。僕は……」

最後に言った言葉をすでに俺の耳に入っていなかった。

「バイバイ」

そう言つて俊也は、この教室から出て行つた。

俺はそれすら気付かないほど、何も考えられなくなっていたのだ。

22・自信喪失

「バイバイ、健斗」

その言葉が頭から離れない。

「藤堂大丈夫か？」

平井が手を差し伸べてくれるが、俺はそれすら見えていない。

周りが真っ暗になってしまったような錯覚が起きる。

俊也……？

「藤堂！！おいしっかりしろよ！！俊也を追いかけていいのか？」

無理矢理、平井が俺を立たせた。平井は柔道部に入っているから結構、力がある。

ひょいっと持ち上げて、俺の方をガシツと掴んだ。

痛い位に力が込められている。

「堂々としろよ！！俊也に確かめなきゃ、なんであんなこと言ったか分からないだろう？」

分かってる。分かってる。そんなの分かってる。

でも足が動かないんだ。

全身が麻痺したかのように、しびれて動かない。

「藤堂。お前……」

平井が何か言いかけた時、教室のドアがバーンと大きな音を立てて開いた。

さつき俊也が出て行ったドアと逆だ。それに驚いたクラスメートと俺達は、反射的にそちらを向いた。

「おい！！さつきすごいスピードで有泉が走っていたぞ？何かあったのか？」

真吾だ。心配になって俺に知らせようとしたに違いない。

「アイツが藤堂のことを大嫌いって」

「有泉が……？」

平井の言葉を聞いた真吾も驚いているようだ。

「俺、どうすればいいんだ。あんなこと言われて……」

俺はあの一言でここまでも弱ってしまった。

なんて俺は弱いんだろう。

俊也に嫌いって大嫌いって言われてしまった。

弱りきつた俺を見た二人は凄い勢いで睨めつけてきた。

「情けないな！！お前それでも男かよ！？そんな一言でグジグジ言いやがつて！！」

何かが爆発したかのように、真吾が怒りだした。

続いてと言わんばかりに、平井の口からも怒声が飛んできた。

「藤堂。俺はな、お前だから頼んだんだぞ。それなのに……」

平井は苦虫を噛み潰したように顔を歪ませる。

「そんな情けない奴に俊也が守れるのか？アイツの傷をいやすことができるのか？」

この二人の気配から普通じゃないと察知したクラスメートが、ザワザワと話し始めた。

「場所変えるぞっ」

この場所ではしっかり話し合うことができないと、真吾はさっき来たドアの方へ歩き始める。

平井も、そして俺も後をついて行った。

よろよろとした足取りで。

俺は本当に情けない。頼りない。

『俊也を守れるのか？』

守れるのだろうか？この俺にできるのだろうか？

『アイツの傷をいやすことができるのか？』

分らない。そんな自信、俺にはない。

——もしかしたら、俺は俊也を好きになっちゃいけなかったのか
もしれないな。

23・俺の弱さ

真吾の後について行くと屋上だった。

最後だった俺が、屋上のドアを閉めて振り向いた瞬間^{とき}。

バシッ！！

真吾は平手で俺の顔を叩いた。

「馬鹿っ！！」

突然のことで分からない俺は、ただ呆然と真吾を見ることしかできなかった。

「お前今、本気で有泉のこと諦めようとしただろうっ！！」

本当のことを言われたから反論できる言葉なんかなくて、黙っていた。

それを肯定と受け取った真吾は、さっき俺をたたいた手をぐぐつと力を込めた。

今度はその拳で俺の顔を殴るのだろうか？

俺はギュッと目を瞑った。

だが、真吾が俺を殴る気配がなかった。ゆっくりと目を開けると淋しそうな顔をした顔の真吾がいた。

平井はそれを辛そうに見ている。

「なあ。お前は本当にそれでいいのか？有泉、今少し混乱しているんだと思う。だからゆっくり話してみよう」

真吾は一度深呼吸して、俺の目を射抜くように、鋭い目を向けた。

「今もし、お前が有泉への気持ちを諦めようと考えろ。だけど本当に諦めることができるのか？」

——俊也のことを好きになっちゃいけなかったかもしれないな

よく考えてみれば、俺に俊也への気持ちを諦めることはできるのだろうか？

そんなことを考えてなかった。

『本当に諦めることができるのか？』

そう問われれば、俺は首を横に振ることしかできない。

「諦めるより、当たって行った方がいいだろ？なあ？」

真吾の目は涙が落ちてきそうなほど潤んでいた。

こんな真吾は見たことがない。

——俺はどうしてだろうか？

いつも不安になって。困った時はいつも真吾に訊いていた。

でも、それじゃいけないんだ。

分かってる、て言っても、全然頭では理解していなかった。

真吾にばかり頼って、甘えていた。真吾は俺の保護者じゃない。頼ってばかりじゃいけないんだ。

俺は自分から何かしようとしていたか？——自分から何かをしようとしていなかった。

俊也に気持ちを伝えようとしたが自分の過去が知られるのが怖くて、結局言うことができなかった。

——自分の気持ちを伝えるなら今かもしれない。

怖いつて気持ちはやっぱり消えない。でも、言わなきゃ何も伝わらない。

俺の弱さ

『それは怖い気持ちに負けて、何も踏み出せなかったこと』

今度こそ俺は伝えなきゃいけない。たとえ駄目だったとしても。

23・俺の弱さ（後書き）

二度目の決意をした健斗。

俊也に自分の気持ちを伝えることができるのでしょうか？

24・友情と…

「ありがとう。真吾、平井。俺、俊也に言ってみる」

俺の言葉に、笑顔の二人。

笑顔と言つか、安心した顔っていた方がいいだろうか？

「そうか。少しは目が覚めた？」

「ああ」

その言葉に真吾はにやりと笑う。

「もう一回叩いてやるっか？もっとスッキリするぞ？」

真吾はふざけて訊いたんだろうが、俺は本気だった。

「ああ。願うする」

即答した俺に、真吾は呆然とする。

「……ええ？」

その答えが意外だったのか、ちょっと苦笑いの真吾。

本当にする気はなかったらしい。叩こうか叩かないか迷っているみたいだ。

俺は叩かれる準備をして目を瞑った。真吾は決心したかのように手を構え、

バシーンッ！！

と、凄い勢いで叩いた。

さっきは手加減していたらしくそれほど痛くなかったのだが、今叩かれたのは涙が出そうなくらいとても痛かった。

多分真吾に叩かれたところは真っ赤になっているだろう。

これでよかった。

新しい気持ちでやっていけそうな気がするから。

「頑張れよ！！健斗」

「おう」

「何だよ。その返事」

真吾は叩きが甘かったかと叩こうする。

平井もそう思ったらしく、叩こうと準備している。柔道部の平井に叩かれてたら、一溜りもないと思い、大きな声で返事した。

「おうっ！！」

「それでよろしい」

真吾と平井は腕組みをし、そう言った。

な。何か、息ピッタリ……。

ほんの少し穏やかな時間は予鈴によって壊された。

キンコーンカンコーン

「もうそんな時間が、じゃあまたな」

手を振って二人は、屋上から姿を消した。

屋上に一人。

俺は大きく深呼吸をした。体中に新鮮な空気が入ってくる。

さっきまでの俺は、焦っていて呼吸することもままならなかったと知った。

——俊也……。

そつと彼の名前を心の中で呟く。

もう一度気を持ちなおすため、自分の顔を両手で叩いた。

俺は勢いよく屋上を出て、階段を駆け下りた。

キンコーンカンコーン

本鈴が鳴る。

慌てた俺は、急いで教室で駆け込んだ。

息をはあはあと切らせながら先生を見ると、鋭い目で俺を睨んだ。

「す。すみません、遅れました……」

「早く席に着きなさい」

はいつと返事をし、よろよろと席に着く。

そう言えば教科書出してなかったと机の中で教科書を探している時、先生の困惑した声が聞こえた。

「あれ？有泉君は？」

俺はその言葉にガバつと顔をあげる。俊也の席を見ると、そこには本人はいなかった。

さっき俺の前からいなくなったとき、教室に戻ったと思ったのに。

突然具合悪くなって保健室にでも行ったのだろうか。

先生は心配になって、保健室に電話したが。

「いないって……」

屋上にはいなかったし、他に行くところは……。

もしかしての不安がよぎる。

「有泉君を最後に見た人」

俺の隣の席に座っていた人が手をあげて、言いづらそうに口を開いた。

「さつき玄関でキョロキョロしているところを見ました」

その一言にクラスメイトがざわざわし始めた。もしかしての不安が的中したのだ。

俊也は学校を飛び出したのだ。間違いない。

「ちょっと先生職員室に行ってくるから……って。藤堂君！？ちよっちよっとなっ！」

先生は慌てて名前を呼んだが俺は無視し、教室で出た。

廊下を走って、玄関に直行。

とにかく俺の頭には俊也を見つけることしかなかった。

俊也に何があったのか？

そして、今度こそ俺の気持ちを伝えるために……。

俺は急いで学校を出た。

25・行方

学校を出て走り出した俺。

一刻も早く俊也は探しださなければならないという時なのに、俺は一旦足を止めた。

ふと思ったのだが……。

——どこに行けばいいんだ？

俊也がいる場所が全く分からない。

一年半一緒にいたのに、俊也が絶対行く場所が思いつかないのだ。

……。

駅前のアイスクリーム屋さん？俊也の家？

なんとか考えて、思いついたのがそれだった。

早速行ってみることにした。

駅前のアイスクリーム屋さん。

幼稚園児は沢山はいたけど、俊也の姿はない。

俊也の家。

ピンポンを押したが、誰もでなかった。

もしかして家にいるけど出ない？とか考えてみたが、俊也の部屋の部屋を覗くとカーテンを引いてなくて、誰もいないがはっきり分かった。

本当にどこにいるのだろうか？

とにかく俺は学校の近くや、俊也の家の近くを走りまわった。

——俊也……一体どこに行ったんだ？

焦りながらも、俺は走り続けた。

俺は息を切らせながら、俊也が行きそうな場所を考える。

そんな時だ。

ブルブルブル……ブルブル……

ズボンのポケットに入れておいた、携帯が震えた。授業中になってはいけないと思って、バイブ設定になっている。

携帯を開いてみると、そこには真吾の名前が書いてあった。

着信だ。

急いで俺は電話に出た。

「もしもし」

「もしもし!？」

真吾の慌てた声が聞こえる。

「どうしたんだ？」

俺の冷静な声が気に食わなかったのか、真吾は怒鳴った。

「お前っ、今どこにいるんだよっっ!？学校大変なことになってるぞ?!」

気持ちは分かる。でも今の俺はそれどころではなかった。

「学校の近く。俊也を探してる」

「有泉を?どうゆうことだ？」

表情は見えないが、とても心配しているのが声で分かった。

「俊也、勝手に学校を飛び出したみたいなんだ」

「なんだって!？サボリとかじゃないんだな？」

真吾はすごい勢いで、話してくる。

真吾の話によると——どうやら俺達はサボり扱いされたらしく、先生が一斉に俺達を探しているみたいだ。

「ああ。サボりじゃない。まだ俊也が見つからないから探す。もし

かしたら俺のせいかもしれない。もしかしてなくてもな」

「分かった。お前はそのまま有泉を探し続ける。こっちはどうにかしとくから」

「ありがとな。真吾」

優しい言葉に素直にお礼を言う。俺はそうすることが大事だと学んだ。

意地を張ってばかりじゃ、人に気持ちを伝えることはできない。

今の気持ちもそうだ。

真吾に、今の俺のこの気持ちを分かってもらったために。

「俊也にいつてくる」

俊也の所へ行ってくる。俊也にこの気持ちを言うてくる。

両方の気持ちを込めてそう言った。

「ああ。じゃあ、頑張れよ」

何回か分からないほど言われた言葉。

その言葉を聞いて、俺は携帯を切った。

『頑張る』

俺は必至に俊也がいそうな場所を考えた。

俊也が行きそうな場所、俊也が好きな場所、俊也と一緒に行ったことがある場所……

「あれ？」

俺は1つだけ思いだした。

まだ行っていない場所があったということ。

その場所はとても思い出深くって――

俊也への気持ちを言いたかった場所でもある。

「そこに俊也がいるはず」

口でそう言ったが、本当にそこにいるなんて確信はない。

最後の望みをかけて、俺はその場所へと走り出した。

25・行方（後書き）

こんにちは、彩瀬姫です。

実は今日24日、健斗君の誕生日です！！

健斗君、お誕生日おめでとう

この日に更新できるように何とか頑張りました。

さて、このお話も終わりに近づいてきました。

目標は30話！！

終われるか心配ですが、「好き」と言ってもいいですか？をよろしく願います！！

26・言いたい

はぁ……はぁ……。

俺が向かっているのはデカザクラのある公園だ。

そこにいるか分からない……分からないけど、もう俺が知っている場所はそこにしかない。

デカザクラの公園に賭けるしかなかった。

走って5分。

全力疾走で走ったから、思ったより速く着いた。

「俊也？」

公園に着いた途端、思わず名前を呼んでしまった。 いるかもわからないのに……呼びたくなってしまった。

早く、早く俊也に会いたかった。

この気持ちを言ってしまいたい。

「健斗？」

不意に俺を呼んだ声が聞こえた。 パツと周りを見渡すが、俊也の影はない。

何だ空耳かぁ……と肩を落とした。俊也に会いたいがために空耳まで聞こえるなんて、情けない……。

少し落ち着こうと、ベンチに腰を掛ける。

此処に来たのは半年前だったろうか……。一緒にした花見。笑いあつて、ふざけ合つて。

「俊也……」

俊也のことを想うだけで、名前を呼びたくなる。

愛しい俺の好きな人の名前。

「どうしてここに健斗がいるの?」

呆然と呟かれた声は、

「俊也?」

目の前に目を見開いた俊也。

「どうして健斗が……授業中なのに」

「それは俊也も同じだろ?」

「……………」

俊也は下を向いて、口を閉じてしまった。

言いたい。言いたい。早く自分の気持ちを言ってしまいたい。そんな衝動に駆られる。

「一体何があつたんだ？」

「……………」

口を閉ざしたまま、下を向いて俺の方を見ようとしない。

何があつたのだから？平井と話していたのがいけなかったのか？平井と話していた俺に嫉妬したのか？

それともまだ、平井のことが好きだとか……。

暗い方向に頭が行くのは当然で、今この状況をどうすればいいのかわからない。

「俺が何か悪いこと言ったのか？それだつたら謝る」

「そうじゃない……………」

ぼそつと俊也は呟く。だが、またすぐに口を閉じてしまう。

「言ってくれ。何があつたのか言ってくれないと……………」

こんな状況で、自分の気持ちを先走ってしまいそうで怖い。

「別に何にもないよ？」

「じゃあ、なんでここにいるんだ？学校飛び出して」

「それは、健斗も一緒じゃん。なんでここに健斗がいるの？」

「お前を探しに来たからだよ」

その言葉に反応して、俊也はゆっくりと顔をあげる。背は同じぐらいだからちょうど視線があう。

「嘘っ」

「本当だ」

「嘘っ嘘っ嘘っ」

俊也は何かに侵されるようにその言葉は連呼する。信じられないと、首をぶんぶん而降りながら、俺の言葉を否定する。

「大丈夫。本当だから……」

「嘘っ。健斗、嘔吐かないで……っ」

泣きそつな目で俺を見ている。

そんな俊也を見てられなくて、俊也に近づいて抱きしめてみる。落ち着いてと優しく背中を撫でると、俊也の体がブルッと震えた。

——俊也は一体、何に怯えている？

あの男のことを思い出して震えて怯えてるのか？

それとも、俺が怖くて怯えてるのか？

「俊也。俺を信じてくれ」

唯今はその言葉しか思いつかなかった。

信じてほしい。俺を信じてほしい。

「信じて……」

その言葉を俊也の耳元で、何度も何度も囁く。

そのまま俺は、俊也傷つかないように、優しく、優しく抱きしめていた。

27・告白

「俊也」

優しく名前を呼ぶと、俊也は騒いでいた声をピタリと止めた。

ぶるぶると震えていた体も少しずつながらも、治まっている気がする。

「信じてくれた？」

問いかけても俊也は口を閉じたまま、何も言わない。

「俊也。さっきも言ったが俺はお前を探しに来たんだ」

「……」

返事をしなくてもいいと、俺は話し続ける。

「なんでここに俺が来たのか知っているか？」

「……」

「俊也が心配だったからだ。そうじゃなかったら授業をほったらかしにして、ここに来るわけがない」

俊也知っているか？

俺がどんなに俊也のことを大事に想っているか。

心配していたか。必至になったか。

そして――

どんなに俊也のことが好きか……。

俊也は知っているか？

だから伝えたい。俺の気持ちを……今、伝えてもいいだろうか？

「俊也。聞いてくれ」

俺は緊張しながらも、俊也を優しく抱きしめながら呟く。

「俊也と会ったのは、もう1年も前だ。初めて二人で会話した日のこと覚えているか？」

多分、俊也は覚えていない。

「俊也が消しゴムを落とした時に……俺が拾ってあげたときの会話が最初だ」

「……………」

「その後はさあ、平井と真吾との縁で仲良くなったな。おれ、本当に俊也と仲良くなれて嬉しかった。だって、俺その時から俊也と話したいと思ってたんだ」

恥ずかしいこと言ってる。

自分がこんなにも話すのは親友の真吾以来だ。

ここまでいえば、俊也も俺の気持ちに気付いているかもしれない。

それでも俺は話し続ける。

しっかりと自分の言葉で気持ちを言わなければ、ちゃんとした気持ちは絶対に伝わらないから……。

「だから、その……ずっと前から俺……」

告白をしようとした時だ。

「知っていたよ」

その言葉に驚きを隠せず、抱きしめていた手を離れた。

やっと俊也は口を開いてくれたという嬉しい気持ちと、何で知っているんだという恥ずかしい気持ち。

「だって、健斗。僕のこと、よく見てたでしょ？」

その言葉で俺は全身汗だくになった気がする。

俊也が俺の目線に気付いていたなんて知らなかった。俺自身無意識に俊也を見ていたのに……。

「ねえ？健斗は知っている？」

「ええ？」

今度は俊也が俺に問いかける。

「僕の方が、健斗をずっと見ていたってこと」

「……ええ？」

「僕が健斗の視線に気付いたのは、僕自身が健斗をよく見ていたからなんだよ？」

……。

頭が一瞬真っ白になった。

俊也が俺のことを見ていた？

俺は恐る恐る質問してみる。

「いつから？」

「健斗が僕の消しゴムを拾ってくれた時から……」

俊也は覚えていてくれた。

あんなに小さな出来事を、俊也が覚えていてくれた。

その事実にとっても嬉しくて、舞い上がってしまいそうになる。

「タツから聞いたと思うけど、僕その輪姦されたことがあって。男

の人のことを信じられなくなっていた。タツは僕を信じることの大切さを教えてくれた一番初めの男。^{ひと}男性恐怖症は治らなくてもタツだけは話せた」

舞い上がってたのはほんの一瞬。

俊也は自分の過去のことを苦しそうながらも、話し始めた。

「だからタツのことを好きになったんだね。宮沢君と付き合っているの聞いた時はショックだった。普通だったら宮沢君のことを嫌になる……僕の好きな人を奪ったって。でも、宮沢君は笑顔で僕に話しかけてくれた。タツ以外の友達ができたんだ。そんな宮沢君を嫌いになるなんて、僕にはできなかった」

俊也がこんなにも話すのは、俺達が失恋した時に観覧車に乗った時以来。

俺は俊也の話を真剣に聞いていた。

「そんなときに、僕に優しくしてくれたのは健斗だった」

俺の名前を呼ばれた瞬間、カラダがびくつと反応した。

「何の接点もない人から、話しかけてもらったことなかったから本当に驚いた」

俊也にとってあの小さな出来事が心に残っていた。

俺だけじゃなかったんだ。

「その時からずっと健斗のことしか見てなかった。恋とは違った」

最後の言葉に胸に矢が刺さったような痛みを感じた。

恋とは違う。そうはつきり言われてしまった。

喜んだりショックを受けたり、俺の気持ちがボロボロになりそう
だ。

失恋でもいい。早くこの気持ちを言ってしまいたい。

「俊也…俺は」

「健斗」

またも俺の告白は、俊也の言葉で閉ざされてしまう。

「前、二人で観覧車で話したよね？あの時のこと覚えている？」

俺はうんと頷いた。

「その時に、僕、気付いたんだ。最初は恋じゃないと思ったけど、
やっぱり恋だったんだって」

俺の鼓動がどんどん猛スピードで早くなる。

「ドキドキしていた。胸も苦しくなった。ずっと話していたい。こ
の気持ちは紛れもなく、恋だって……」

それって、もしかして……

「僕、健斗のこと好きだよ……」

28・気持ちを伝えたいのに。

……咄嗟に何と言われたのか分からなかった。

俊也からその言葉を言われるとは思っていなかったからだろう。
俺は数秒、目を瞠って固まっていた。

「健斗？」

不安そうな声で名前を呼ばれた。俊也の声でやっと正気に戻る。

「……ええ？」

……。

「迷惑だった……？」

突然の告白に驚いただけだったが、俊也はどうやら勘違いしているようだ。

慌てて俺は、誤解を解く。

「ええつとその……。嬉しい」

「ええ？」

俺の言葉に驚いたのか、俊也は目を瞠っている。うつすら頬を赤く染めているのは気のせい？

俊也からの告白は、とても嬉しいもの。喜びたいのだけど……ちよっと俺自身困惑していた。

この勢いで俺も告白していいのだろうか？

俊也が恋として、恋愛感情として俺のことを好きって言うてくれた。なのに、俺はどこかで嘘なんじゃないかって疑っている。

俊也が俺を好きははずがないって……。

——結局、俺は弱いままなんだ。

自分から告白することもできず、俊也から告白してくれた。

俺から告白しようと思ったのに……。

これはもうどうしようもならないのだろうか？俺は小心者のまま？

そんなのは男して嫌だ。

今だ。チャンスは今なんだっ。

力強く俊也を見つめて、告白しようとする……。

「俺も……俊也のことが、」

「駄目っ今行っちゃダメ!!」

俊也は強い力で、俺を押しつける。

俺も、と返事をしようとしたのに、　またも俊也は俺の言葉を遮る。

「どうしてだ！？俺は自分の気持ちを言っちゃいけないのか？」

ここまで言えば、俊也は俺の気持ちを分かっているはずだ。

それなのにどうして、俊也は頑なに俺の言葉を遮ろうとするのか、
分からなかった。

強い言い方がよくなかったのか、俊也の目には涙が浮かんでいる。
俊也は力なく、俺の肩を掴んで言った。

「お願い……今言わないで……？」

俺が聞いたことのない俊也の弱々しい声。強く懇願する鋭い瞳。

「どうして？」

しつこいかもしれない。

それでも、どうして言うてはいけないのか、俊也の口から聞きた
かった。

「……僕……」

俊也の声に涙の色が混じっていた。その声を聞くと、俺までもが
辛くなった。

そして——俊也から伝えられたことは、俺に辛さだけではなく

悲しみも与えた。

「僕、外国に引つ越すんだ……」

——ええ……俊也が外国に？

俺の頭の中が真っ黒を通り越して、何もかも拒絶するように、頭の中が真っ白になった。

29・「好き」と言ってもいいですか？

「外国……………」

俺は呆然と呟いていた。

俊也が外国に引越……………？

「いつ？」

溢れだしそうな気持ちを抑えて、冷静に訊いた。

いつ？いつ引越すのか？

冷静と言っても、心の中で混乱しっぱなしだった。

「明後日」

その言葉は俺に絶望を与える。

あさって……………。

「なんでそんなに急なんだ！？なんでもっと早く教えてくれなかったんだ！！」

冷静と言つゝ文字がすっかり何処かに飛んで、俊也を責めた。

どうしてそんなに大事なことを言ってくれなかったんだ！？俺のことが好きって言ったのにどうして……………？

そう訴えると、俊也の目から涙がすーっと頬を伝った。

「好きだったから…。健斗のことが好きだから伝えられなかったんだよ！！」

ポロポロと大粒の涙が落ちてくる俊也の顔を見ていられなくて、俺は俊也をもう一度抱き返した。

俊也の体はブルブルと震えていた。

どうしてだろう。どうして俺はこんなにも鈍いんだろう。

俺は無防備に俊也を傷つけてしまった。

辛かったはずだ。外国に行くなんて簡単に告げられるはずない。俺が俊也の立場だったら絶対言えないと思う。

それでも言っただけだと思っただけだ、俺が俊也のことが好きだからだ。

——好きだから言いたい。

——好きだから言えない。

俺達の中で二つの気持ちが入り混じっている。

根本的なところは同じ気持ちなのに……。

「ごめん。俊也……」

俺が謝ると、俊也は顔をあげて笑顔を見せた。

「大丈夫。僕こそごめんね。実はね。僕の父さんはフランス人と日本人のハーフだね。僕はクウォーターなんだ。小学校に上がるまではフランスで暮らしていたんだ」

初めて聞いた事実には驚きを隠せない。

「父さんはシェフをしているんだけど、その実力が認められたからフランスに帰ることになったんだ。僕は日本に残るって言ったんだけど、母さんがそのお……僕がまた大変な目に遭っちゃいけないから、無理矢理でも連れて行くって言われて……」

どうしても断れなかったというのだ。

そうだよな。大変な目に遭った子供を一人で残して外国に行くなんてできないよな……。

どうしようもない事実。

「また会えるよな？」

「う……ん」

元氣のない返事を聞いて俺は不安になる。

「いつまた日本に帰ってくるんだ？」

「2年ぐらいか……それか、もっとだと思っ……」

2年。もしかしたら3年5年10年。何年も帰ってこれない。

寂しいとか苦しいとかそういう問題じゃなくて、何もかも感情を無にしそう。

嫌な気持ちを消したくて、無理矢理明るい話題にする。

「俊也が帰ってきたとき、俺の気持ちを言ってもいいのか？」

今が駄目ならそういうことだろう。

だが、俊也はとても冷たい言葉で言い返した。

「僕が日本に帰ってきた時に同じ気持ちだったらね……」

その言葉に俺はとてつもなく淋しさを覚えた。

まだ俊也は俺のことを信じてくれないのか、と。

——それだったら、俊也が俺を信じてくれるようにするまでだ。

「変わらない。俺の気持ちは絶対変わらない。俊也と離れていても変わらないからっ!」

だって今、この時、この瞬間、俊也のことが好きだから——。

俊也を好きって言う気持ちが変わるっていうことを考えていない。考えることもできない。

「分かった。健斗を信じるから……」

俊也は大きく深呼吸をして俺の耳元で囁く。

「僕がこの町に帰ってきたとき、健斗の気持ちを教えて？」

俺は大きく頷き。

俊也の体も、そして俊也の心も強く強く抱きしめる。

俊也が日本に帰ってきたら――

「好き」と言ってもいいですか？

俺はずっと俊也の帰りを待っているから……。

29・「好き」と言ってもいいですか？（後書き）

次回、最終話です！！

30・好き

——あれからちょうど、6年が経つ。

俊也は俺と平井と真吾にだけお別れを言い、フランスへと旅立った。

俊也のいない高校生活。それはとても大変なものだった。

真吾と平井がいなかったら、俺はどうなっていたのか分からない。

栄養失調で倒れていたかもしれないほど、俺は弱っていた。

「おい！！しっかりしろよっ！！健斗。今の有泉がお前を見たらどうする！？カッコわりーぞっ」

その真吾の言葉で何とか立ち直ったものの、俺は空気のようにふわふわと生活していた。

毎日俊也とメールをやり取りしていたが、気持ちを言えないから、胸がキューッと締め付けられるようになる。

会いたい……。

言葉が俺の中を支配する。

俊也に早く会いたい……—。

そんなこと思っても無駄だと思っていたけど、そう思わずにいら

れなかった。

そんなある時、俺はガラリと変わった。

俊也が言っていたことを思い出したのだ。偶然だった。

どうして「あの時」の言葉を思い出したんだと不思議だけど、この言葉があったから今俺は、「ここ」で生きている。

「センサー。ここどうするのか教えて？」

ここ——学校。俺は教師をしている。

昼休み。職員室で昼食を取っていたところだった。

女子生徒が持ってきた教材を見て、ふと笑みがこぼれる。

「どこだ？……ああ……ここか。ここはなあ……この公式をつかってな……」

俊也の苦手だった数学の高校教師。

『健斗って教え方上手いよね』

俊也のそのたった一言で、俺は教師になろうと思った。

もともと人に勉強を教えるのは好きだったから、俺に会ってるかもなっと思ったのがきっかけだ。

女子生徒が教えてほしいと言ったところは、丁度俊也が何度も教えてと言ったところだったのだ。

何度も教えたから、一番説明し慣れていると言ってもいい。

「センサーって怖い顔してるけど、意外と笑顔可愛いね」

怖いとは小さい頃から言われ慣れてたけど、可愛いなんて言われたことないから（多分）どう反応すればいいのか……と固まっていると生徒は面白そうにキヤツキヤツと騒ぎだした。

「センサーってなんて言うかあれだね…初心。そう初心!!」

決め台詞を言ったかのようにすっきりとした顔をされた。

俺としては微妙な心境なのだが……。

「可愛いところもあるんだけど、センサーってちょっと鈍い所あるでしょ？彼女に嫌われてもしらないからね」

普通なら簡単に流せる話。

だが俺にはどうしても流すことができなかった。

「終わったなら帰りなさい」

素っ気なく言うと生徒はまたも笑う。

「図星？センサーって分かりやすっ」

笑いながら、職員室から出ていく。

そんな生徒を見て、隣に座っていた同じ学年の先生が俺の肩に手をポンとのせる。俺より15年上と言っていた水内先生だった。

「藤堂先生。最初は疲れますよね……。この頃先生、元気ないし大丈夫？」

俺は傍から見ても疲れていたのだろうか？

無理矢理笑顔を取り作ろうとすると、水内先生は首を横に振る。

「藤堂先生、無理しないで。最初はきついと思うけど」

無理に大丈夫だといったら、逆に心配されてしまった。

学校って難しい。先生って難しい。教員一年目だから、と言うこともある。

けど、今の大きな原因はほかである。

「すみません、心配をおかけしまして……」

深々と頭を下げると、水内先生は家々と顔の前で手を振ってみせる。

「悩み事があつたら、他の先生でもいいから相談しなよ？」

水内先生の温かい言葉。

「はい。有難うございます」

ブブブブ…ブブブブ…

バイブ設定にしてあった携帯が俺の胸ポケットの中でブルブルと振動する。水内先生に断りを得て、屋上へと向かった。

着信で、名前は——真吾。

「もしもし」

「もしもしっつ、健斗お？」

慌ただしい声が聞こえる。電話の向こうからざわざわつと騒がしい雑音が入ってくる。

「そうだが…用件はなんだ？」

あまりに素っ気ない声に真吾はムツとする。

「何その言い方っ。一週間ぶりの電話なんだぞ？」

「だから？早く用件を言え。お前忙しんだろ？」

何となくだが、真吾が今どういう状況にいるのか分かっている。

「まあーな。ちょっとした休憩だからあと10分後にはまた行かなくちゃいけないんだ」

真吾は実はモデル兼俳優をしている。高校卒業前にスカウトされ

て、大学に行かずモデルと俳優をしているのだ。

ここ2、3年で真吾はすっかり有名人になり、真吾と直接会うより、テレビで会うが多いと思う。

「で？」

「有泉からなんか連絡あったか？」

「……………」

なんで、なんで。真吾はこう言う時ばかりにいたいところをついてくるんだ！！

事情を察したのか、電話の向こうで、うんうんと頷いている。

「あーはいはい。連絡がなかったわけね」

「ああ…………毎日メールしてたのに突然一昨日から来なくなって……………」

そう、俺が疲れたように、無理に笑ってごまかしていた原因はこれである。

毎日していたメールがパタリと一昨日から来なくなってしまったのだ。

心配と言うより、怖いという気持ちの方が大きい。

メールを毎日とかウザかったのだろうか？とか、もう俺の好きじゃなくなっただのか？とかいろいろなことが考えられる。

真吾は俺を励ますように、明るい声で言った。

「まあ、気にするなよ。そのうち来るさ」

「そうだな…もしかしたら、電波がつかないところにいるかもしれないしな……」

ぽつぽつと答える俺に、キレたのか真吾は怒ったように言葉を吐き捨てる。

「そうじゃなくて…ああもう！！じゃあ、健斗頑張れよっ！！」

「はあ？」

ブチッ！…ツーツー

……今のはなにげに逆切れされたのでしょうか？

まあっ真吾が忙しいのは分かっているから、あまり責めたりはしないが。

電話が終わったので、職員室に戻ろうと階段を降りる。

一段、また一段と……。ゆっくりゆっくり下って行く。

「つつ！！」

誰かとぶつかった。ボーっとしながら歩いていた俺が悪い。

謝ろうと顔をあげた時だ。

「ええ？」

俺は目を疑った。

だってここにはいないはずの人が此処にいるのだから。絶対い
いはずの人がどうして……学校に？

目を擦ってみても、前にいる人物は変わらない。夢かと思って頬
を抓ってみるけど、ちゃんと痛くって……。

「嘘だろ？」

その言葉に彼は笑みをこぼす。

「嘘じゃないよ？というか、久しぶりに会ったのにその顔は嬉し
くない」

俺の前にいる人物は、わざとムスツとした顔を見せる。

「……俊也？」

「うん」

「本当に？」

「本物だよ？っていうか、ここまで見てまだ信じられないわけ？」

ええ？ええ？

なんで俊也が日本にって言うか、俺の職場にいるんだ？

頭の中がパニック状態で……。

「もう……何泣いてるの？」

俊也が俺の頬を落ちた涙を拭う。

いつの間にか涙がぼろぼろと出てきた。

俊也がフランスに行く時は一度も出なかった涙が噴水のように流れて俺の頬を伝う。

「ただいま、健斗。帰ってきたよ」

ギュッと俊也は俺に抱きつく。

温かい……。

俊也の温度を感じて、まだまだ涙は止まらない。

帰ってきたんだ。俊也が帰ってきたんだ……っ。そう思うとすんなり言葉が出てきた。

「お帰り、俊也」

嬉しかったのか俊也は、俺の頬にキスをしたが、俺は無理矢理俊也を引き剥がす。

まだ駄目なんだ。俺はまだ俊也に答えていないのだから……。

深呼吸をして、落ち着こうとするが、落ち着けるわけもなく。

5年間ずっと言いたかった言葉を俺は口にする。

ずっとずっと思い続けた俊也への気持ちを……いま――。

「好きだ」

一度言ってしまうば、もう止まらない。

「この6年間、俊也の気持ちが消えることなんて一度もなかった……」

溢れてくる。俺の想い。

6年分の想いを俊也に伝えたい。

「ありがとう。健斗。僕も大好きだよっ……！」

どちらともなく、抱きつき、見つめ合って、静かに静かに口接吻を交わした。

ここが学校っていうことも忘れて……。

「好き」っていう言葉

それは――

とてもストレートな愛の言葉

たった二文字なのにとっても大切な愛の言葉

何度も何度も言いたくなる愛の言葉

――好きだよ、俊也……。

END

30・好き（後書き）

あとがき

こんにちは、彩瀬姫です。

「好き」と言ってもいいですか？
最終話でした。

初投稿作品ということで、10話以内の短い連載から始めようかなと思っていたのですが、あれも書きたいこれも書きたいと思ったら、いつのまにか30話までなっていました。

文章がおかしくなっているところがたくさんあると思います。
文章力がないもので、すみません。

最終話というものを初めて書きましたので、こういう風にしようかとすごく迷いました。

どうだったでしょうか？

コメントを頂けると嬉しいです！！

曖昧な点がいくつかあるので、番外編で書いていければなと思います。
ます。

これから小説を書いていくので、よかったら読んでください。
読んでくださった皆さん、本当にありがとうございました。

2009年5月26日

彩瀬姫

番外編・想い1（前書き）

番外編、第一弾。

俊也がフランスに行っている間の気持ち。
今回は一体、誰の気持ちなのでしょう？

番外編・想い1

俊也がフランスに行ってから数ヶ月が経つ。

なにもかも空っぽだ。

俺の気持ちも、俊也への気持ちも。

俊也は俺の気持ちを言わないで、って言っていた。帰ってきたときに行って欲しいと……。

俊也の気持ちが分からなくもない。

でも俺は言いたかった。あの時「好き」と伝えたかった。

俊也を好きになって1年間、言うことができなかったのは俺がいけない。

分かってるんだけど、何か心の中がすっぱりと抜けた感覚が残る。

「おい！！すっかりしろよっ！！健斗。今の有泉がお前を見たらどうする！？カッコわりーぞっ」

分かってる。そんなの分かってる。

でもやっぱり、いつもメールはしているけど、寂しいのだ。

メールだけじゃ、文字だけじゃ全然足りない。

顔が見たい。声が聞きたい。

可愛い笑顔が見たい。健斗って名前を呼んでもらいたい。

我儘だ。我儘なことを言っている。

俺が俊也のもとへ行けば……と思ったこともあるけど、やっぱり俺は小心者だから、俊也の元へ行く勇気がない。

だから、早く俊也が帰ってきてほしい。

俺の元へ。

そしてあの言葉を言いたい。

「好き」

言えないのが辛くて、何度も何度もメールで伝えてしまおうかと思ったけど、俊也に直接言いたいと思い直し、言いとどまってきた。

~~~~~

いつもの着信音が流れる。

俊也からのメールだ。

携帯を開くと、今日の出来事などが、ずらずらっと書いてあった。

自然と胸の奥がドキドキッと速くなっていくのを感じる。

俊也がいなくなってから、その気持ちはますます大きくなるばかりで、頭の中がパンクしそうだ。

早く帰ってきて。

きっと再会したら、好きって伝えるから……。

番外編・想い1（後書き）

今回は健斗の気持ちを書きました。  
次回は誰でしょうか？

次の更新は、6月9日の予定です。

## 想い2

「……………」

ここ一週間、幼馴染が元気ない。

原因は分かっているのだが、俺にはどうしようもできない。

原因である有泉は、一週間前にフランスに行ってしまったからである。

「起きろー！おい！！遊びに来てやったぞ」

「……………」

完全無視……………。

初めての事態。もう一度、声をかけてみる。

「健斗。おい、起きろよ！！」

「……………」

本当に寝ているのか、俺がでかい声をあげてもピクリともしない。

もしかしたら、いろいろ考えすぎて寝不足かもしれない……………それでも、今この小心者の幼馴染と話をしなければいけないかった。

健斗のために。

「屋上、行くぞ」

眠っている健斗を無理やり起こした。

本人は何が起こっているのか分からないらしく、目をパチクリさせている。

無理やりなんてしたくなかった。

それでも、やっぱり俺はこの幼馴染が心配なのだ。

ここまで弱り切ってしまうのは、健斗が有泉のことが本当に好きだからだと分かる。

それはいいことかもしれないけど、このままではいけない。

ただ健斗は寂しい気持ちを抱きっぱなしで、立ち止まっているだけなんだ。

前に進まなければいけない。

どんなに寂しくても、つらくても、前に進まなければ、何も始まらない。

何より、こんな健斗の姿を見た有泉が可哀想だ。

屋上についた後、引っ張っていた手を離した。突然、離させてびっくりしたのか、健斗は一瞬足元をふらつかせた。

「健斗。お前、このままでいいのか？」

俺は諭すように、健斗に聞く。

「分かってるんだけどな」

頭では分かっているんだけど、気付かないうちに落ち込んでいるというわけか。

「おい！！しっかりしろよっつ！！健斗。今の有泉がお前を見たらどうする！？カッコわりーぞっ」

「ああ、そうだな」

いつもならムキになって言い返してくるのだが、健斗は自嘲気味に笑っただけだった。

落ち込んでいる幼馴染に元気になってほしいけど、俺に元気にすることはできない。

どうしようもない事実だから、しょうがない。

そう思っているときだ。

「真吾。もういいだろ、行くぞ」

俺の後ろに、タツがいた。

「ええ？」

そこにいるとは思わず、間抜けな返事をしてしまう。

タツはそれを気にしていないのか、無表情で俺を屋上から連れ出そうとする。

そんなタツに、俺は気付かれないように笑った。

ほっとしてやれと言っているのか、それともこの頃、健斗ばかりにかまっているから嫉妬しているのか……

後者だと思ってしまう俺は、多分馬鹿だと思う。

## 想い2（後書き）

番外編「想い2」は真吾視点でした。

健斗を心配していたはずなのに、最後はちょっと違う方向へ言うってしまいました。

中途半端なところで終わってしまいましたが、この後の健斗は、なんとか立ち直ることができたわけです。

次は、いったい誰視点なのでしょう？

次回の更新は6月15日以降です。

しっかりとした日にちは決まっていませんが、6月中には更新できるようにしたいです。

### 想い3（前書き）

今回は誰の想いなのでしょうか？

### 想い3

「会いたい……」

口に出すと余計に会いたくなると分かっているけど、言わずには  
いられなかった。

僕がフランスに来て数ヶ月。健斗は元気にやっているのかな？

——勉強中。僕は机に向かっていた。

こっちには慣れてきたし、ここの生活も楽しい。それでもやっぱり足りない。

健斗がここにいないということが、何よりも寂しかった。

「健斗」

名前を言えば、少し恥ずかしそうに振り向いてくれた。

その彼がここにはいない。毎日メールをするけど、やっぱり足りない。健斗が足りない。

健斗の笑顔が見たい。健斗の照れた顔が見たい。

そして、僕に「好き」と言ってほしい。

健斗は今、僕のことどう思っているのかな？

あの時、僕が好きって行っただけ、健斗も僕への気持ちを言ってくれようとした。俺も…って顔で訴えてきた。

でも僕は健斗にその言葉を言わせなかった。

だって、人の気持ちは変わりやすい。

もしかして、僕が引越した後、健斗が好きな人ができたら？

「やっぱ無理」なんて言われたら、僕が壊れてしまいそうで……

怖かったんだ。

何年も離れてしまえば、健斗の気持ちはもしかして、違う人になってしまうかもしれない。拒絶されるかもしれない。

それは違うと気付いたのは、フランスに来てからのことだ。

毎日交換しているメール。

健斗が僕のことを心配にしていることがよく分かった。

気持ちが伝えようとしているのか、わざわざ回りくどい言葉を使っ  
て…。

なんで僕は、全部信じてあげられなかったのだろう？と思うのだ。

あの時は僕は信じている。と言ったのに、どこかそれを信じてい

ない僕がいた。

信じていれば、あの時に気持ちを言ってもらえばよかったのに、それをしなかった僕はやっぱり、健斗をどこか信じ切れていなかった。

「健斗、大好きだよ」

僕は健斗が好き。じゃあ健斗は？

きっと「好き」って言ってくれる。

僕はそれを待つことしかできないけど、きっと大丈夫つ。

健斗を信じているから……。

健斗のメールを待ちながら、力強く携帯電話を握りしめた。

### 想い3（後書き）

今回は俊也でした！！

俊也の気持ちを書くの、すごく楽しかったです。

えっと次回で番外編、最後となります。

最終話の後のお話を書く予定です。

更新はできるだけ早めに行いたいと思います。

好きと言った後…

好きと言った後……。

まだ俺は仕事だったので、俊也には悪いが、一旦学校から出てもらった。

俺が仕事終わったら会おうということになり、また俊也には学校に来てもらったのだ。

「そつえば、なんで俊也は俺の働いている学校分かったんだ？」

俺の家までの帰り道。

ふと思った疑問を聞いてみた。高校で働いているとはメールで教えたが、どこの学校かと聞かれなかったので答えなかったのだ。

「ああ……真吾君が教えてくれたんだよ」

「真吾?!」

俊也はのんびりとした口調で行っていたが、それはとても驚くべきことだった。

アイツ、そんなこと一言も言っていなかった。

……もしかして、電話してた時には俊也が日本に帰っていること知っていたのか？

『頑張れよ!』

と、言っていたのはこのことだったのかもしれない。

「真吾君は責めないでよね。僕が真吾君に言わないでって頼んだんだから」

楽しそうに俊也は笑っている。なんでだろうと首をかしげていると、

「面白いからに決まってるじゃん!」

「……はあ?」

これだから健斗は…と俊也は溜息をついている。

まったく意味の分からないことを言われた。その意味を頑張って考えようとするがやっぱり浮かばなくて……。

俊也は俺に何かを諭すように、真剣な目で見つめてきた。

「健斗。いい? 健斗は反応が面白いから、揶揄いがあるのっ」

「うん?」

「……もついいよ。今からそれを証明するからっ」

「……?」

首をかしげるが、そんな俺の様子を俊也は楽しそうに眺めている。

6年間で、俊也は変わった。

変わらないなんてありえないかもしれないけど、知らない俊也がここにいると思うと、不安に思う。

ずっと一緒にいたい。

傍にいてほしい。

それが叶わない夢だと思ったことあったけど、今は違う。

俊也は俺の隣にいてくれる。そう思えるから…。

「なあ……？俊也、何をもったえぶってるんだよ」

俺が焦ると、もっと俊也は楽しそうな顔をする。

それに拗ねたい気分だが、久しぶりの再会なのだ。カッコいいところを見せたいと見栄を張る。

「うん……まだ秘密っ。もうすぐ分かるから」

目の前に少し古そうなアパートが見えてきた。そのアパートの2階に俺は住んでいる。

ボロボロの階段を音を立てながら登っていくと？

「なんで俺の部屋の前にトランクが置いてあるんだ？」

トランクが一つ。

何となく見たことがあるトランクだなあ……。と考えたのは、ほんの一時、すぐに誰か分かった。

もしかしての予感がよぎり、俺は俊也を横目で見る。俊也は慌てて、違う違うと手を顔の前で振る。

「ああ！大丈夫。そういうことじゃないよ。僕、ちゃんとした家あるからね」

その言葉に一度安堵するが、

「僕、健斗のお隣に引っ越してきたから。これからもずっと一緒だね」

「へえ？」

俺は耳を疑う。

俊也はくすつと笑って、もう一度言う。

「聞こえなかった？だーから、僕、健斗のお隣に引っ越してきたの」

目をパチパチパチ。

三回瞬きして、ようやく意味は把握した。

「ええーーーーー!!」

いつもは大声を上げない俺だが、近所迷惑を考えずに叫んだ。

まずはいったん落ち着こうと、俺は自分の部屋に入る。俊也も後から付いてきているのが、気配で分かる。

水を飲んで深呼吸だと、床に座る。それに続いて、俊也も俺の隣に座った。

「ほらね。やっぱり健斗は面白いんだって。6年たっても変わらないねえ」

何も喋らない俺に、俊也はムツとする。

「健斗は僕と一緒にいられるの、嬉しくないの？」

悲しそうに言われれば、強く言えなくて。

「嬉しいに決まっているだろう」

と、ぶっきらぼうに言葉を放つ。

「お前は変わりすぎだよ……」

頭を抱えながら言うが、俊也は平然としている。

「変わったんじゃないで、健斗が知らないだけっ」

「そうかもな」

俺は自嘲気味に笑った。それが凶星だったからだ。

俺は俊也のことを実はあまり知らないのだ。だから俺は、これくらいっぱい俊也のことを分かりたい。努力をしたい。

「俊也だって俺のこと知らないだろ？」

「少なくとも、健斗よりは知ってると思うけど……？」

「……………」

言い返せないのが悔しい。確かに俊也のほうが知っているかもしれない。

少し肩を落とすと、

「そんなに落ち込まないでよ。ほら、今からお祝いするんだからっ  
っ」

俊也は俺を励ますように、肩をぼんぼんと叩く。

「俊也のお帰り祝いか？」

顔をあげると、俊也は優しい笑みで俺を見ている。その笑みがとても可愛らしくて、つい頬に触れてしまった。

俊也はその俺の手に、自分の手を重ねてきた。

「両想い祝い」

鼓動が速くなるのを感じる。

俊也は俺に恋を教えてくれた——初恋の人。

「ずっと一緒にいようね」

「ああ、約束な」

キスを交わして、

お互い隙がなくなるぐらい、きつく抱きしめて

見つめあいながら、優しく囁く

「好き」

二人だけの甘い時間が流れていく——……

好きと言った後…（後書き）

□お知らせ□

スピノフ作品「手をつないでもいいですか？」を書き始めました。

主人公はあのひと（？）です。よかったらそちらも読んでください。

最後まで読んで頂き、有難うございました！！

1周年記念「小さな想い」(前書き)

10話と11話の間のお話となります。

## 1周年記念「小さな想い」

高校1年生で、俊也と俺が失恋してちょうど1ヶ月が経った頃だった。

俺と俊也は名前で呼びあうのが、やっと慣れてきた日の出来事。

「健斗、何処へ遊びに行く？水族館がいいなあ」

テストの最終日。半日で終わるので俊也は遊びに行こうと誘ってきた。

俊也の言葉に、俺は苦笑する。

「どこに行くって聞いておいて、自分で答えてる」

真吾と平井は逆に俊也の言場に納得したようだ。

「それが、有泉なんだからしょうがないんじゃないか？なあ、タツ」

「俊也らしいよな」

そんな言葉を聞けば本人は黙ってるはずもなく、頬をハムスターのように膨らませて拗ねている俊也がいた。

「僕らしいってどういうこと！？」

慌てる姿が可愛くて、つい笑ってしまったのだが、それも俊也が気に入らなかつたらしい。

俊也は、またも拗ねて、俺達から顔を背けてしまった。

真吾と平井二人は意外に意地悪だったらしく、俊也の行動を面白がっているようだ。

そのことに関しては、俺的には全然といっていいほど面白くないのだが……。

言い方は恥ずかしいが恋をして半年以上がたった今。

俊也と話しても緊張しないぐらい話すことに慣れてきた。ちょっとした仕草にドキツしたり、俊也の一言一言が気になったりする。こんな経験初めてだった。

これが恋なのか自覚したときは、恋した相手が同性ということは自分自身驚いたし、最初はどうすればいいのか戸惑ったけど、真吾に大丈夫だと言われて少しずつだけど、進展しようと頑張っていた。「水族館か……俺はいいけど、真吾と平井は……？」

どうするか真吾と平井の方を振り向くと、二人なぜか神妙に考え込んでいた。

何をそこまで考え込む必要があるのか分らないと、首をかしげると。

「二人で行ってこいよ、なあ？」

真吾はしらつと言って見せた。平井はというと、うんと頷いただけだった。

「二人は用事があるのか？」

「そうだけど？」

嘘くさい返事で、二人が意図しての言動と分かった。

要するに二人で行って来いと言ってるのだろう。

「それだったら4人でいける日にしないか？」

健斗はさりげなく二人の思惑から外れようとするが、なにも知らない俊也はとんでもないことを言ってくれる。

「今日がいいんだ……。二人がいけないのは残念だけど、今日は二人で遊びに行ってくるね！」

ええ……………？

俺は驚きを隠せず、目を大きく見開いたまま呆然としていた。

平井に駄々をこねるのかと思っていた。一緒に言っただけで、予想外の反応に俺の頭には疑問符だらけだ。

「じゃあ俺達、教室にもどる。二人で楽しんでこいよ」

真吾はふざけながら笑っていて、平井何か複雑な表情をしていた。「うんっ」

俊也は、楽しそうに頷いていた。

\* \* \*

今日は学校から近くの水族館に来た。日本でも有名の水族館でも館内は広い。

「わぁーい、お魚がいっぱい！！見てみて健斗！！お魚がいっぱいだよ」

俊也の小学生みたいに楽しんでしゃぐ様子を見るのは俺としても楽しいのだが、あっちに行こう、こっちに行こうと腕を引っ張られ少々疲れ気味だ。

「そうだな」

返事が平凡すぎたらしく、俊也は楽しくないの？と問いかけるように俺に目を向けてきた。

「あの大きなサメ凄いいよね！水槽とかどうやって掃除するのかな？サメ食べられないよう掃除する方法とかあるのかな？」

頭がいいと言われる俺でも、さすがにそこまでわからない。

「どうなんだろうな……」

だが、そんなことは俊也はどうでもよかったらしく、あっちには面白いのがいるとぐいぐいと腕を引っ張られた。

そこには俺が知っている。日本人がよく知っているお魚がいた。

「俊也。あの魚の名前知ってるか？」

その魚を指差すと、俊也は分からないと首を傾げる。

「アジ。食べれるアジ」

俊也は驚愕といった感じで、アジを凝視した。

「アジって焼き魚にすると美味しいアジだね……？今日食べちゃったんだけど、朝ごはん……」

何とも複雑だと、俊也は言う。

水族館の中は薄暗くて、俊也の表情が見えにくいけど寂しそうに瞼を伏せたのが雰囲気があった。

俊也は本当に純粹だ。

いまどきの小学生でもこんなにも純粹な人はいないと思う。

肩をちゃんと突いてみると俊也はピクツと跳ねて、口を尖らせた。  
「ほら、行くぞ。イルカ―ショーを見るじゃないのか？そろそろ時間だぞ」

俊也の頭ポンポンと自然と撫でてしまったのは、本人気付かず。  
「えっ？うん！」

\* \* \*

「ああ、楽しかった！有難う、健斗」

グーッと空に向かって手を伸ばす俊也は、恥ずかしそうに言った。  
「そうか、それはよかった」

俊也が楽しければ、俺はそれでよかった。

平井の失恋からもう何ヶ月もたっているけど、きっとそんなに簡単に傷は癒えるものじゃない。実際、俺はまだ俊也のことが好きだ。諦めていないと言う言葉にすると、頷けるか分からないが。少しでも俊也の気持ちが楽になってくれると嬉しい。

俺の気持ちにはただ苦しくなるだけだけど。俊也が隣に居てくれるから大丈夫だ。

俊也と同じように俺も空を見上げた。空は真っ赤に染まっている。  
「あのね、健斗ちょっと公園寄っていい？」

突然の申し出だが、断るわけもなく、ただ俺は頷いた。俊也が俺の腕の裾を引っ張るので、それについて行くように歩いていた。

背は同じぐらいなので、歩幅は同じくらいなはずだ。だが今は俊也の一步一步の歩幅が大きく、ついていく俺は軽く早歩きだ。

何処の公園行くのだと思ったら、いつも行くデカザクラのある公園だった。

「どうしたんだ？」

「ちよつと、ねえ……」

俊也は眉を下げて笑って、デカザクラの前に立った。そして何かを思ふかのようにそつとデカザクラに触れた。

夕日に照らされてる俊也。そつと吹く風が桜の木を揺らし、木蔭が優しく俊也を包む。

——綺麗だ……

俺は感嘆した。

幻想的でとても綺麗だと思った。

俊也にはどちらかというと可愛いという感情が占めていて、綺麗  
ということはありませんにも不似合いだった。

だけど今は「綺麗」と一言しか浮かばない。

「知ってた？」

俊也は空から視線を外し、俺に向けた。

「ええ……？」

何を聞かれたのか分からない俺は何をと促す。

「今日、実は僕の誕生日なんだ」

「そうなの……か？知らなかった。言ってくればよかった」

俺は少なからず、シヨックを受けていた。

好きな人の誕生日を知らなかった。

真吾か平井が教えてくれればよかったのと思う反面、自分から聞けばよかったのだと自己嫌悪に陥る。

「プレゼント、遅くなるかもしれないけど待ってくれるか？」

今日渡したかった。だけど、今急いで渡したものではありません俊也には失礼だと思う。

せめて時間をかけて俊也のプレゼントを選びたい。自分の勝手だけ。

だけど、俊也は首を横に振った。

「いらないよ。健斗と遊びに来てよかった」

「でも……」

「本当に何もいらなんだ」

きっぱりと俺の目を射抜くように。俺はそんな俊也の目を見て何も言えなくなってしまう。

強い意志がそこにはあって、有無を言わせてくれはしなかった。

「健斗知ってる？この木の前で告白すると恋が叶うんだって」

気についている手に俊也は目をやり小さく笑った。

今、俊也は誰を思っている？

その笑顔はやっぱり……。

「知らなかった」

俺は嘘をついた。

平井に聞いたことがあるので、本当は知っている。

「ねえ……健斗は好きな人……いる？」

その質問にひどく動揺する。

「突然な、なんだ？」

「うん？なんとなく訊いてみただけ」

俊也は特に気にした様子や俺を揶揄う様子は微塵もなく、本当にただ聞いてみただけなんだと分かった。

「いるって言ったらどうする？」

どうしてこんなことを口にしたのか分かんないけど、言ってしまったものはしょうがない。俊也の答えを待った。

「そんなの分かんない。だけど寂しいかな？」

「寂しい？」

「うん、寂しい。だって、こうやって遊んでくれなくなるじゃん。彼女とかできたらきつと健斗は付きつきりだと思う。健斗は優しいさるんだよ」

俊也の表情は、笑っているようにも見えるし、本当に寂しそうな表情をしているようにも見えるし、今の俺には分からなかった。

「俊也は、いるのか？好きな人」

俊也はもったえぶるように腕を組んでいる。

「うん？どうだろう？……秘密」

唇に人差し指を押しあててそう言った。子供っぽい仕草なのに、俺にはドキツとする仕草だった。

「また遊ぼうね」

いきなりな話の転換だったけど、気まづくなるよりはいいと思う。

「ああ……そうだな」

「また」があるんだと思った瞬間、頬が緩んだけど。

俊也に見られていないといい……。カッコづけたいだけなのは自分がよく分かっている。

早く俊也の失恋の傷が癒えてくれますように。

——そして、いつか俊也の隣を俺に下さい……

「俺は俊也が好き」

それはきつと変わらないから

俊也の一番に今はなれなくてもいいから、ただ俺はそれを願おう。

\* \* \*

「健斗ー！！起きてよー！！」

俺を揺らして起こそうとしているのだろう。だが寝起きの悪い俺はなかなか起きれない。

「無理……眠っ……」

「仕事遅刻するよ！！先生が遅刻してもいいのかな？」

「ええ！？」

起き上った瞬間に、目の前に俊也の顔があった。

「おはようゝ健斗」

チュツと音を立てて頬にキスされた。一瞬にしてポツと顔が赤くなつた気がする。

「おはよう……」

恥ずかしくて視線を逸らしてそういうと俊也は楽しそうに笑っている。

「ご飯できてるから食べてね」

最近、俺の部屋にも来るようになって朝ごはんを用意してくれる。

まるで『新婚夫婦』

「今日はね、オムレツを作ってみました」

「ありがとう」

二人恋人になつた今、照れることも多々あるが緊張することはほとんどない。

喧嘩は少々あるがいつも仲直りするし、楽しくやっている。

「あつそういえば、健斗。さっき寝ながら優しく笑ってた」

「あつ？……高校の時の夢を見てな」

「どんな夢？聞かせてよ！！」

俊也はテーブルを乗り出して訊いてくる。

「俊也と水族館に行った夢」

「僕の誕生日のやつ？……懐かしいな……。あの時にはもう健斗のこと好きだったし」

「えっ！？」

初耳だ。

「驚いた？」

「驚いた。じゃあいつ俺のこと好きになつたんだ？」

そう問いかけたら、俊也は思わせぶりに俺のくちびるに人差し指を押しあてた。

「うん？どうだろう……秘密！」

あの日と同じ台詞は俊也は覚えていたらしい。

「秘密が多いな」

「健斗には言われたくない」

「どういうことだ」

「さあーどういうことでしょう？」

ニコニコ笑っている俊也は楽しそうで……。  
もうどうでもよくなってしまうた。

今は願うことだけじゃなくて、夢が叶った。

好きって思いもしっかり伝えることができた。

……じゃあ、あとは？

俊也と一緒に居ることが、俺の幸せだ。

夢を叶えておしまいじゃなくて、ずっとこの時間が続くと思いたい。

そのために努力も必要で。

俊也も俺と同じ気持ちでいてくれることも大切だ。

——小さな想い。それは今も思い続けている。

## 1周年記念「小さな想い」（後書き）

こんにちは！彩瀬姫です。

こちらでは、お久しぶりです。

今日12月26日で「好き」と言ってもいいですか「シリーズ（いつの間にかシリーズ化）1周年です！！

記念ということで、健斗と俊也のお話をあげました。

ちよっと久しぶりに書いたので矛盾点もあるかもしれませんが。  
バンバン指摘してください。

今日は私がネットで小説をかき始めて一年というの日でもありません。

「好き」と言ってもいいですか？が初作品なので。

一年振り返って、小説を書き始めて、漢字や意味を知ることができたなと思っています。調べて初めて意味を知った言葉も沢山あります。勉強になりました。

あと、少しは文章力が上がったかなと思います。

沢山の感想いただけてとても嬉しいです。

有難うございます！

最近は忙しくて「手をつないでもいいですか？」月一更新になっていますが、時間があれば更新したいと思っています。

読んで頂き、有難うございます！

これからも彩瀬姫をよろしく願います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7820f/>

---

「好き」と言ってもいいですか？

2010年10月10日19時30分発行